

日本國天皇家論

7章 日本書紀論

—— 近畿天皇家に一元化された二つの天皇家 ——

日本書紀論

日本書紀編纂目的

日本書紀全三十巻について続日本紀は、「養老四年(710)五月癸酉の条に「先是一品舍人親王勅修日本紀至是功成奏上紀三十巻系図一卷」と書いている。ここでは書名は日本紀である。日本書紀は帝紀であるから、本来の名とすれば日本紀がふさわしい。日本書紀とは「日本書の紀」と解釈するべきであろう。何故、この史書が編纂されたのか。その目的は何か。通常、その目的は次のように語られている。

当時日本として国威を誇示するためには、欽定の正史を必要としたに違いないが、正史は紀伝体の「書」でなければならぬとする観念がすでに行われていたのである。そこで名称としては、紀伝体を意味する「日本書」をとったのである。が、事実は紀があるだけで、志や列伝はないので、「日本書」という題名の下に、小字で「紀」と記して、日本書の紀であることを表示したのでであろう。…そこに国外にも存在を示そうとした書紀の性格を見るべきであり、古事記が国内ばかりに目を向けていたのとはちがうと見るのが通説である。

(日本書紀日本古典文学大系「日本書紀」解説小島憲之)

編纂目的を「国威高揚」だと考えるには重要な天皇紀が抜けている。平城京の完成(710)、大宝律令の制定(701～710)、行政を太政官と神祇官に分け、太政官のもとに八つの省を置いた「二宮八省」の行政組織の完備等々、これらは古代日本最大の国家事業である。そしてこの時の天皇は元明天皇である。もし内外に日本の国威を示す目的で編纂されたのであれば、古代日本で最も輝かしい代である元明天皇まで記述が及ばなければならない。新生日本の誇るべき姿を多くの紙面を割いて述べるべきであったろう。むしろ三十巻という制約もあったが、もし日本の国威を示す目的ならば、元明天皇を抜きに編纂されることはない。他の天皇の代を併合してでも元明の代を設けたであろう。

日本書紀は「国威誇示」「海外向け」という目的で書かれた歴史書ではない。日本書紀は第三十巻持統天皇で終わる。編纂目的はこの最終巻にある。日本書紀は持統天皇が「神代」から連綿と続く天皇家の正当な継承者であることを国内に示すために編纂されたのである。この正当性主張が日本書紀編纂の目的である。なぜ、そんなわかりきったことに膨大な時間と費用をかけて史書として明記する必要があったのか。理由は672年7月壬申の乱にある。壬申の乱は奈良の日本國天皇家の内紛ではない。大海人皇子とは神武の末裔、九州天皇家の皇子だった。壬申の乱とは奈良に都を置く日本天皇家大友王への九州天皇家大海人皇子の反乱である。当時博多には白村江大戦の勝者、唐の極東司令官が駐在していた。日本國天皇家の天智天皇及び朝廷はその戦後外交のため太宰府に出向していた。天智天皇が琵琶湖畔近江宮で崩御した後、大海人皇子は蜂起した。戦場は北九州、勝利したのは博多に駐留していた唐軍を味方につけた九州天皇家大海人皇子であった。

天武・妻持統は国権の正統の継承者ではなく、国権の篡奪者だったのである。持統は自らの皇位継承を正当化するために日本書紀を編纂した。

日本書紀の構成

日本書紀は持統天皇の皇位継承の正当性主張のために編纂された。構成は九州天皇家紀、日本國奈

良天皇家紀、再び九州天皇家紀、そして持統の近畿天皇紀という四層構造となっている。

(1) 卷第一神代上から卷第十六(九州天皇家)

卷第一神代上から卷第十六小泊瀬稚鷯天皇(武烈天皇)までは九州の天皇紀である。ここまでの天皇紀は古事記と一致する。古事記とは九州天皇家の伝承を成文化したものである。

(2) 卷第二十七から卷第二十七(奈良日本國天皇家)

卷第二十七男大迹天皇(継体天皇)から卷第二十七天命開別天皇(天智天皇)は日本國奈良の天皇紀である。九州天皇家史から奈良の日本國天皇家史へ転換する舞台に立つのが継体天皇である。日本書紀継体天皇は近江國(滋賀県)高嶋郡の宮から樟葉宮(枚方市)に入り、即位する。「継体」という諡はまさに九州天皇家から日本國天皇家へ「体制を継ぐ」という意味を持つ。「継体」以降の日本書紀舞台は奈良を中心とした関西である。

(3) 卷第二十八～卷第二十九(九州天皇家)

卷第二十八天淳中原瀛真人天皇(天武天皇)は壬申の乱戦記である。戦場は北九州である。戦記に登場する「吉野宮(小倉南区)」「近江京(小倉南区)」「倭京(香春町)」「伊勢(行橋市)」「京(太宰府)」「東國(太宰府の東の国、つまり行橋市)」「飛鳥寺(香春町に存在した寺)」「嶋宮(下関市彦島に存在した九州天皇家の王宮)」等は全て北九州に存在した地名である。

卷第二十九天淳中原瀛真人天皇(天武天皇)は九州天皇家として初めて皇位に就いた天武の治世の記録である。天武は九州天皇家の「倭京(香春町)」の「飛鳥浄御原宮」で即位した後、太宰府に入って全国を統治した。天武の時代、日本の首都は九州太宰府だった。

天武紀の「京」とは太宰府である。「大極殿」とは太宰府大極殿である。「向小殿・内安殿・外安殿」とは太宰府建造物である。「伊勢神宮」は行橋市に存在した天照大神神社である。

では天武紀では日本國天皇家はどう表記されているか。「大倭國」である。古事記は九州天皇家国家を「倭(ヤマト)」と表記しているが、関西に存在した本家、奈良日本國天皇家を「大倭國」と表記したのである。その11年に天武は「難波朝廷の立禮を用いよ」と命令している。「難波朝廷」とは日本國朝廷をさす。当時九州天皇家では「座禮」であったが日本國天皇家では国際的な「立禮」を用いていた。天武は海外との外交の中で、「立禮」を用いる必要性を知ったのである。

天皇位に就いた天武は新羅大使を度々接待している。その場所は「筑紫」と書かれている。「筑紫」とは博多である。天武は太宰府に居たから海外の貴賓を「筑紫(博多)」で接待できたのである。天武7年12月に「筑紫國」大地震の記事がある。天武紀が博多地震の記録を残した理由も天武が太宰府に居たからである。

(4) 卷第三十(持統近畿天皇家)

卷第三十高原廣野姫天皇(持統天皇)の前半は九州天皇家の記録である。持統は天武・草壁亡き後、九州天皇家の一族を引き連れ、故郷奈良に戻り、日本國天皇家の首都藤原京で即位した。ここから持統を始祖とする近畿天皇家が始まる。持統は政治改革・宗教改革を断行した。それまで奈良日本國天皇家の国教は世界基準の仏教であった(そのシンボルが法興寺)。持統は九州天皇家の祖先神「天照」神社を現在の三重県伊勢に移し(伊勢神宮の創建)、復古的な神道を国教とした。持統は奈良天皇家の先進的・世界水準の行政体制・国際交流を捨て、九州天皇家伝統の復古的な天皇親政を敷いた。さらに全国に国替えを行った。その際、新しい地方国名に九州天皇家の国名を使用した。その結果九州天皇家の「伊勢」「美濃」「伊賀」「近江」「出雲」「信濃」「尾張」「東海道」等は全国の国名、地名となった。こうして八世紀の新律令国家が誕生した。そして日本書紀が編纂された。日本書紀には二つの地図が内包されている。九州天皇家地図と奈良日本國天皇家地図である。この地図は持統律令国家以前の地図である。

卷1～卷16 神武九州天皇家の始まり

持統皇位継承の正当性を主張する日本書紀が複雑な構成となったのは持統の生い立ちと生涯に理由がある。

持統天皇。名は鸕野讃良皇女、天智天皇と重臣蘇我倉山田石川麻呂の娘との間に生まれた。生まれは奈良である。鸕野讃良皇女は十三歳で大海人皇子に嫁いだ。その時大海人皇子はどこにいたのか、日本書

紀はその場所を明示していない。場所を特定するために万葉集の持統の歌を読んでみよう。

万葉二八番歌

春過ぎて夏来るらし白樺の衣乾したり天の香具山

「夏来たるらし」の「らし」は「推定」の助動詞で「・・・らしい」という意味である。「春が過ぎて夏が来たらしい」と詠ったこの歌には鵜野讃良皇女の季節への違和感が表れている。もしこの歌の「天の香具山」が通常考えているように奈良の「香具山」であったとすれば、この季節への違和感是不思議というべきであろう。鵜野讃良皇女は生まれも奈良で育ちも奈良である。「夏が来たらしい」と奈良明日香の夏の到来を「推定」はしない。奈良明日香の夏はいつか、「香具山」に干される夏の衣を見なくても充分分かっていて、鵜野讃良皇女の歌は故郷奈良での歌ではない。異国での歌である。異国での初夏の到来が故郷奈良より早いと感じたのである。

「ああ、この國ではもう夏が来たらしい。香具山の麓の民家はもう夏の白い麻服を干しているではないか」

鵜野讃良皇女がこの歌を詠った異国とはどこか。嫁ぎ先、大海人皇子が居た國である。大海人皇子の國は奈良明日香より早く夏が到来した。その驚きがこの歌となった。鵜野讃良皇女が詠った「天の香具山」とは明日香の香具山ではない。この時代、もう一つの香具山が存在した。そしてこの香具山こそが万葉で詠われた「天の香具山」である。奈良明日香の香具山は万葉では「青の香具山」と詠われている。「天の香具山」と詠われた名山は明日香のあの低い山ではない。

「天の香具山」を詠ったもう一つの有名な歌がある。

万葉第二番歌は「高市岡本宮の天皇」の國見の歌である。「高市岡本宮の天皇」は通常日本書紀舒明天皇」と同一視されているが、日本書紀舒明天皇とは別人である。その真実はこの歌が明らかにしている。天皇が詠った「倭(やまと)の國」とは奈良ではない。

山常には 群山ありと とりよるふ 天乃香具山 登り立ち 國見をすれば 國原は
煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ うまし國ぞ あきつ島 八間跡の國は

「村山有等」の訓み

通常は「群山あれど」と訓まれ、意味は「多くの山々があるが」と解釈されている(日本古典文学大系 萬葉集) しかし、原文は「村山有等」である。「等」は清音「ト」として使われるので、「ムラヤマアリト」と訓むべきである。

「山常には 村山ありと」の意味

「群山」は原文では「村山」である。「群」も「村」も同じ意味で「集まっている」の意である。「村」には人が集まって暮らしているから、「村」なのである。「村山」「群山」は多くの山々の意ではなく、集まっている山々の意である。つまり「群山」とは「連山」の意である。句の意味は「ヤマトには(名高い)連山がある」である。

「とりよるふ(取与呂布)天乃香具山」

この句も古来難解とされ、正確な意味は分からぬまま現在に至っている。「取与呂布」は接頭語「トリ」と「ヨロフ」の複合語である。「ヨロフ」は「寄る」で問題はない。だが「都に寄っている」では意味をなさない。ここは全く普通の意味で「寄っている」でよい。都に寄っているのではなく、「群山」と同じ意味で、幾つかの山々が寄り集まっているという意味である。山々が寄り集まっている。その中の一つが天の香具山という意である。

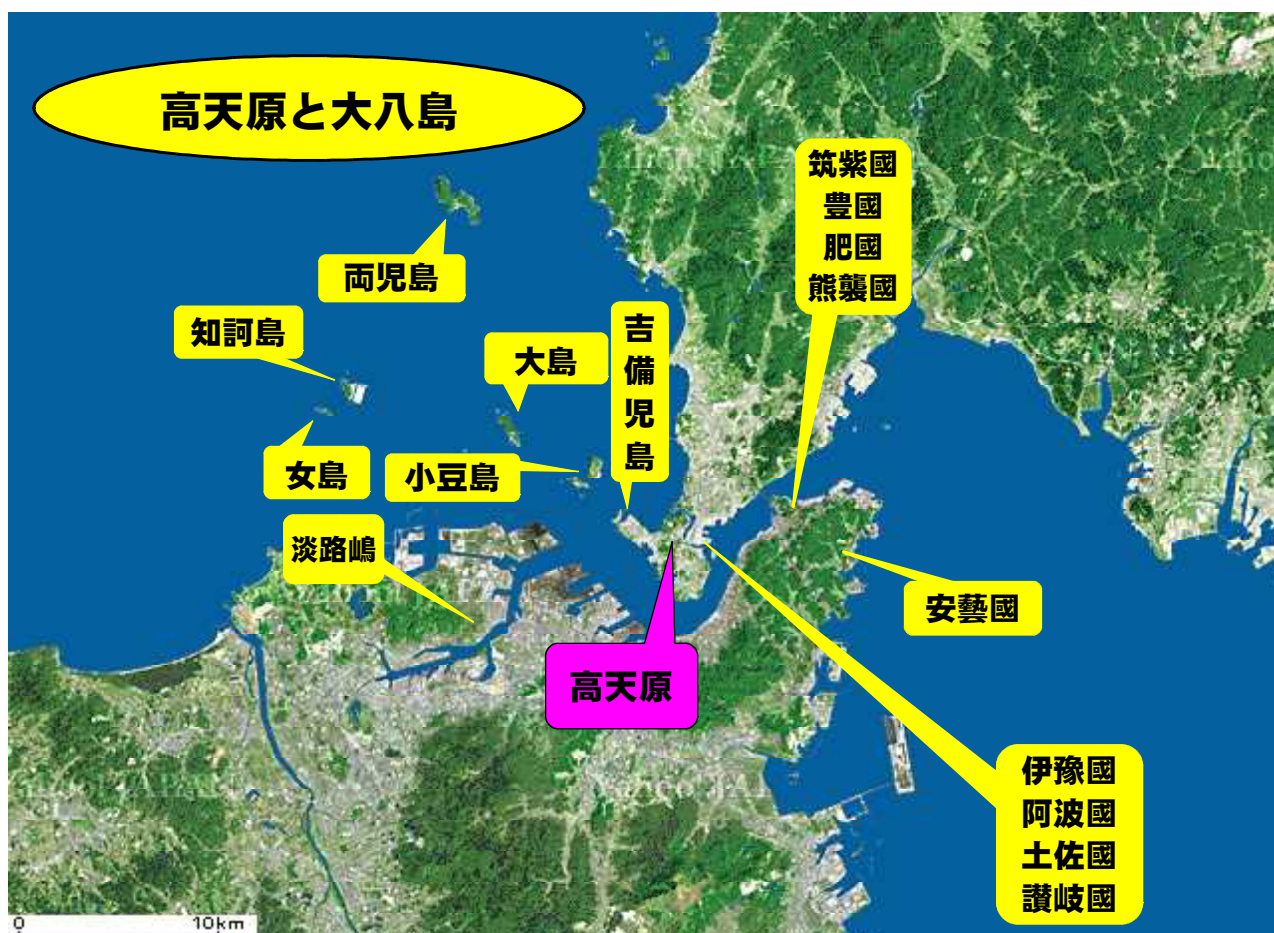
さて、この「山常」の天香具山とはどこの山か。山頂に立った岡本宮天皇は、「國原は 煙立ち立つ海原は 鷗立ち立つ」と詠っている。民家から食事を作る煙が立ちのぼっている。海ではカモメが飛び立っている。このように國が一望できる群山の一つ、天の香具山とはどの山か。香春一の岳である。香春岳は三連山である。ほぼ500Mの山がそれぞれ独立しながら三つ連なっている姿は特異である。王朝内では有名な山だったであろう。故に、倭(やまと)には名高い群山(連山)がある、と歌いだしている。天皇が見た倭國の風景を再現してみたいのであるが、残念ながら高市岡本宮の天皇が登った名山、天香具山は現在上半分が存在しない。

持統が詠った「天の香具山」とは香春町の香春一ノ岳である。大海人皇子は九州香春町に居た。何故大

海人皇子は九州香春に居たのか。大海人皇子は九州天皇家の皇子、神武を始祖とする九州天皇家の皇子として香春町に居たのである。

日本書紀巻第一は神代に始まる。日本書紀解説のため私たちは九州天皇家の遙かなる祖伊邪那岐命・伊邪那美命が創建した「大八洲」の世界を旅することから始めよう。きっといくつもの驚きに充ちた旅行となることをお約束する。「大八洲」とはいかなる世界か。

大八洲建国から天孫降臨



「國之常立神」より伊邪那岐命・伊邪那美命までを神世七代という。伊邪那岐命はよく知られている神である。伊邪那岐神・妹伊邪那美神の時代の記憶は正確で、且つ、明快である。「大八洲國生み」は建国というより統合といったほうがよい。彦島の「高天原(たかがはら)」を中心とした、いわば、「関門海峡連邦」をまとめるのが、伊邪那岐命・伊邪那美命の仕事であった。

産む時に至るに及びて、先づ淡路洲を以て胞とす。意に快びざる所なり。故、名けて淡路洲と曰ふ。迺ち大日本豊秋津洲を生む。次に伊豫二名洲を生む。次に筑紫洲を生む。次に億岐洲と佐度洲を雙生む。世人、或いは雙生むことあるは、此に象りてなり。次に越洲を生む。次に大洲を生む。次に吉備子洲を生む。是によりて、始めて大八洲國の號起れり。即ち對馬嶋、壹岐嶋、及び處處の小嶋は、皆是潮の沫の凝りて成れるものなり。亦是水の沫の凝りて成れるとも曰ふ。

大八洲建国説話には十の「一書(あるふみ)」がある。二人の任務は建国というより統合である。伊邪那岐神・妹伊邪那美神は新しい国家(弥生集落)を建設したのではない。先在した国家と戦い征服して、新しい国家を創建するという時代はすでに終わっていた。国家創建時代の王は姫氏系図の「阿岐」・「宇」・「阿米」・「熊」・「豊」等である。彼らは彦島周辺に「阿岐國」「豊の國」「熊曾國」など一族の弥生集落を作っていった。だが、

それらの國(弥生集落)はそれぞれバラバラに存在していた。そこで、伊邪那岐神・妹伊邪那美神は、これらの「ただよえる(分散した)國を統合統一せよ」と命じられた。これが「大八洲國生み」の物語である。

伊邪那岐夫婦が支配下に収めた淡路嶋とは若松区、伊豫二名嶋とは彦島老町、隠岐三子嶋とは下関市伊崎町、筑紫嶋とは旧門司区、壱岐嶋・佐渡嶋・津嶋とは門司区新開、大倭秋津島とは門司区大積である。これらの弥生国家のほとんどは島(中洲)の港に形成されていた豊かな集落だった。それぞれに王、女王が統治していたが、伊邪那岐命・伊邪那美命はこれらの島々を巡り、一つの統一国家に作り上げた。関門海峡国家連合ともいべき王朝が誕生したのが「大八洲國生み」の実体である。

天照大神・月讀尊・素戔鳴尊の誕生

その後、伊邪那岐神は、人生の晩年に、神武九州天皇家にとって重要な三人の子どもを得る。天照大神と月讀尊と素戔鳴尊である。

伊弉諾尊、既に還りて、乃ち追ひて悔いて曰はく、「吾前に不須也凶目き汚穢き處に到る。故、吾が身の濁穢を滌ひ去てむ」とのたまひて、則ち往きて筑紫の日向の小戸の橘の櫨原に至りまして、菰ぎ除へたまふ。遂に身の所汚を盥滌ぎたまはむとして、乃ち興言して曰はく、「上瀬は是太疾し。下瀬は是太弱し」とのたまひて、便ち中瀬に濯ぎたまふ。因りて生める神を、號けて八十枉津日神と曰す。次に其の枉れるを矯むとして生める神を、號けて神直日神と曰す。次に大直日神。又海の底に沈き濯ぐ。因りて生める神を、號けて底津少童命と曰す。次に底筒男命。又潮の中に潜き濯ぐ。因りて生める神を、號けて表津少童命と曰くす。次に中筒男命。又潮の上に浮き濯ぐ。因りて生める神を、號けて表津少童命と曰す。次に表筒男命。凡て九の神有す。其の底筒男命・中筒男命・表筒男命、是即ち住吉大神なり。底津少童命・中津少童命・表津少童命は、是阿曇連等が所祭る神なり。然して後、左の眼を洗ひたまふ。因りて生める神を、號けて天照大神と曰す。復右の眼を荒ひたまふ。因りて生める神を、號けて月讀尊と曰す。復洗鼻を洗ひたまふ。因りて生める神を、號けて素戔鳴尊と曰す。凡て三の神ます。已にして伊弉諾尊、三の子に勅任して曰はく、「天照大神は、以て高天原を治すべし。月讀尊は、以て滄海原の潮の八百重を治すべし。素戔鳴尊は、以て天下を治すべし」とのたまふ。

伊邪那岐が帰国して禊をした場所は、「筑紫の日向の小戸」と書かれている。「筑紫」とは國生みの「筑紫洲」である。「日向」は「日が向かう」という意味で、西を示す。「小戸」とは瀬戸のことである。この瀬戸は三つに區別される。「上瀬」「下瀬」「中瀬」である。この「筑紫洲」とは博多ではなく、九州天皇家の「筑紫」、門司港である。従って、伊邪那岐が禊をした瀬戸は、門司港の西にあって、上(かみ)・中(なか)・下(しも)と、三つに区分される瀬戸である。この瀬戸とは、彦島の小戸である。住吉大神となった「底筒男命」「中筒男命」「表筒男命」の三人も、それぞれ、彦島瀬戸の上・中・下に対応する神である。

時に伊邪那岐命、大く歡喜びて詔りたまひしく、「吾は子を生みて、生みての終に三はしらの貴き子を得つ。」と詔りたまひき。即ち御頸珠の玉の緒母由良邇、取り由良迦志て、天照大御神に賜ひて詔りたまひしく、「汝命は、高天原を所知らせ」と事依さして賜ひき。故、其の御頸珠の名を、御倉板舉之神と謂ふ。次に月讀命に詔りたまひしく、「汝命は夜之食國を所知らせ。」と事依さしき。次に建速須佐之男命に詔たまひしく、「汝命は、海原を所知らせ」と事依さしき。

(古事記上卷)

「天照大神」の誕生の地は、彦島小戸に面した弥生集落であった。この集落は古事記では「阿波」とも呼ばれた。直角に曲がる彦島小戸を流れる潮はぶつかって「泡」となる。その様子から「阿波」という地名になった。天照大神は彦島小戸で生まれ、彦島に存在した弥生集落、「高天原」で育った。

天照大神はその名の如く、「阿米」が建設した「高天原(老いの山公園)」を受け継ぐことになる。古事記では弟の「月讀命」は「汝命は夜之食國を所知らせ」と命令されている。この命令はその名前の如く、「月を読む」仕事である。「月を読む」という意味は、太陰暦の作成である。この頃はすでに正確な太陰暦が作られていた。

古事記神代には、「故、日子穗穗手見命は高千穂の宮に五百八十歳坐しき」という記述がある。この「五百

八十歳」も正確な記録といえる。この年数を記録した暦は太陰暦であるが、それは24倍歴である。580年÷24＝24年である。暦作成とは政治、行政を意味する。「月讀命」の仕事とは、いわば、「阿米」國の国務であった。天照大神が国主、月讀命が宰相という関係である。邪那岐命・伊邪那美命から天照大神、その弟、素戔鳴尊までその物語の舞台は「高天原」、すなわち彦島である。

天孫降臨(天王朝の海外侵出)

天孫降臨の土地である「葦原中國」は出雲王朝の支配下にあった。出雲王朝を啓いたのは「天(あま)」で非行を繰り返し、追放された素戔鳴尊である。「天(彦島)」を追放された素戔鳴尊が向かったのは「出雲國の簸」の川上である。これが本線である。だが、一書は別の場所も伝える。「安藝國」と「新羅國」である。

- (1) 是の時、素戔鳴尊、天より出雲國の簸の川上に降到ります。
- (2) 一書に曰はく、是の時に、素戔鳴尊、安藝國の可愛の川上に下り到ります。
- (3) 一書に曰はく、素戔鳴尊の所行無状し。故、諸の神、科するに千座置戸を以てし、遂に逐ふ。是の時に、素戔鳴尊、其の子五十猛神を師いて、新羅國に降到りまして、曾尸茂梨の処に居します。乃ち興言して曰はく「此の地は吾居らま欲せじ」とのたまひて、遂に埴土を以て舟を作りて、乗りて東に渡りて、出雲國の簸の川上に所在、鳥上の峯に到る。
- (4) 一書に曰はく、素戔鳴尊の曰わく「韓郷の嶋には、是金銀有り。若使吾が児の所御す国は、浮寶有らずは、今だ佳からじ」とのたまひて、乃ち髭を抜きて散つ。

(1) 安藝國

この國は伊邪那岐命の國生みの「安藝國」である。更に遡れば、「安藝」は姫氏系國の國王「阿岐」が作った國である。古代「安藝」は広島ではなく、門司大積である。素戔鳴尊は「安藝國の可愛の川上」に到着した。門司大積には奥畑川が流れる。川上とはその上流の黒川付近であろう。門司大積には素戔鳴尊の足跡が残っている。

<天疫神社>

祭神: 櫛名田比売命、須佐之男命

由緒: 創建等は不明ですが、「丸山城主、大積上聰介隆鎮の鎮守で、世に大積殿と云われていました。落城後、大積の村人の尊崇厚く、正保3年(1646年)現在地に移転し、大積村の鎮守社とした」と大積村志に書かれています。
(<http://members.jcom.home.ne.jp/eirakuan2/mo-ootumi.htm>)

(2) 新羅國

一書(第四)は「素戔鳴尊、其の子五十猛神を師いて、新羅國に降到りまして、曾尸茂梨の処に居します」と書いている。「新羅國」は韓半島の新羅國というのが一般の理解である。だが、他は「出雲」「安藝」と全て“地元”である。天(彦島)から朝鮮半島に行けないことはないが、飛躍する。

天(彦島)の近くに素戔鳴尊が向かった「新羅」だと思える国が一つある。國生みの「筑紫嶋」には四つの弥生国家が存在した。その中の一つが「筑紫國」である。この国には「白日別」というもう一つ名前があった。「白」は「しら」と訓む。「日」は東、別は分国の意である。「白(しら)」とは「新羅(しんら)」であろう。「白日別」は「新羅の東の分国」という意味となる。「天」を追放された素戔鳴尊が降ったと云われる「新羅」は韓半島ではなく、筑紫國(白日別)である。

彦島(天)を出た素戔鳴尊は、関門海峡を渡って、門司港(白日別・新羅)に着いた。門司港(筑紫國)は伊邪那岐命が治めた國である。素戔鳴尊には門司港には住みたくなかった理由が何かあった。次の國へ向かっている。それが「安藝國」である。門司港から国道25号線を南下すれば、門司大積に流れ込む奥畑川の上流で出る。

(3) 出雲の國

是の時、素戔鳴尊、天より出雲國の簸の川上に降到ります。

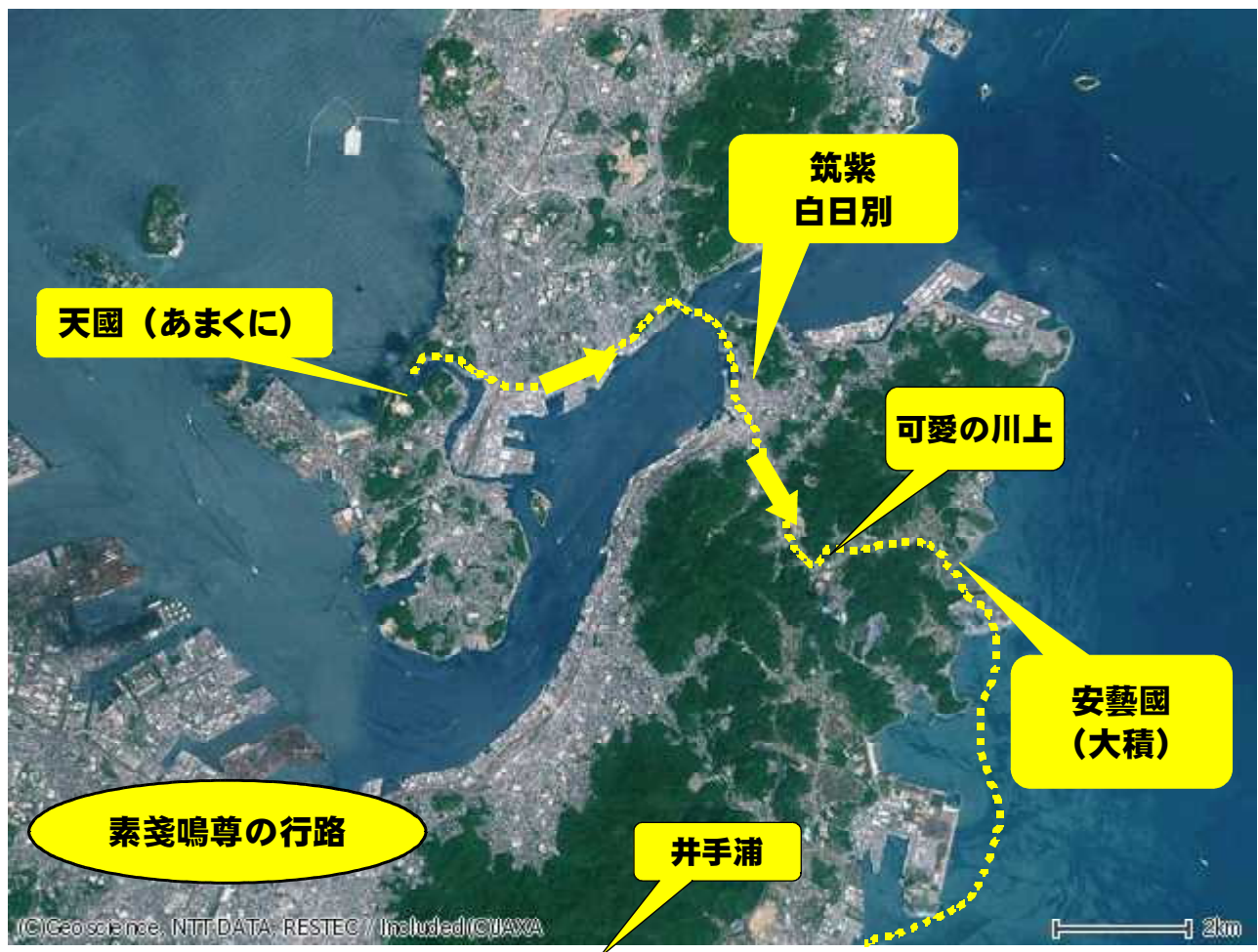
素戔鳴尊が「安藝」から次に着いた國が「出雲國」である。ここで有名な「高志の八俣の遠呂智」を退治する。出雲神楽のハイライトである。神楽では「遠呂智」は大蛇である。だが、実際の「遠呂智」は大蛇ではない。「高志」は國名である。「高志」が國名であることを古事記は記している。

此の八千矛神(大國主命)、高志國の沼河比賣を婚はむとして、幸行でまし時、其の沼河比賣の家に到りて、歌ひたまひしく、
(古事記・大國主命)

「八俣」は地名、「遠呂智」は人名である。では、素戔鳴尊が最後に訪れた「出雲國」とはどこか。素戔鳴尊が姿を現したのは島根県・出雲なのか。残念ながら、島根に姿を現したのではない。素戔鳴尊の記録が残るのは島根とは遠く離れた小倉南区の「井手浦」である。この「井手浦」には素戔鳴尊の伝承が残っている。この村の人々は素戔鳴尊が「遠呂智」と戦った時、射手として参加した。よって、その村の名を「井手(射手)」という。

素戔鳴尊は天(彦島)―「白日別(門司港)―安藝(門司大積)―小倉南区と訪れた。素戔鳴尊が降臨した伝承は「安藝」「新羅」「出雲」に残る。その理由は素戔鳴尊はそのうちのどれか一つの国に降臨したのではなく、順次訪れたからである。最後に到着した國が「出雲」だったという訳である。

「出雲國」とは小倉南区である。小倉南区にも素戔鳴尊の足跡が残る。小倉南区下吉田に「須佐之男」を祀った建速神社が曾根の海を望む高台に存在する。小倉南区には「稲葉」という地名が残る。「稲葉」は「因幡」である。「因幡の白ウサギ」の物語は小倉南区稲葉の物語である。



天孫降臨とは「天(彦島)」から「瑞穂の國(小倉北区)」への進出

時に、高皇産靈尊(たかみむすひのみこと)、眞床迫衾(まどこおふすま)を以て、皇孫天津彦火瓊瓊杵尊に覆(おほ)ひて、降(あまくだ)りまさむ。皇孫、乃ち天磐座(あまのいはくら)を離(おしは)なち、且(また)天八重雲を排分(おしわ)けて、稜威(いつ)の道別(ちわけ)に道別きて、日向(ひむか)の襲(そ)の高千穂峯に天降

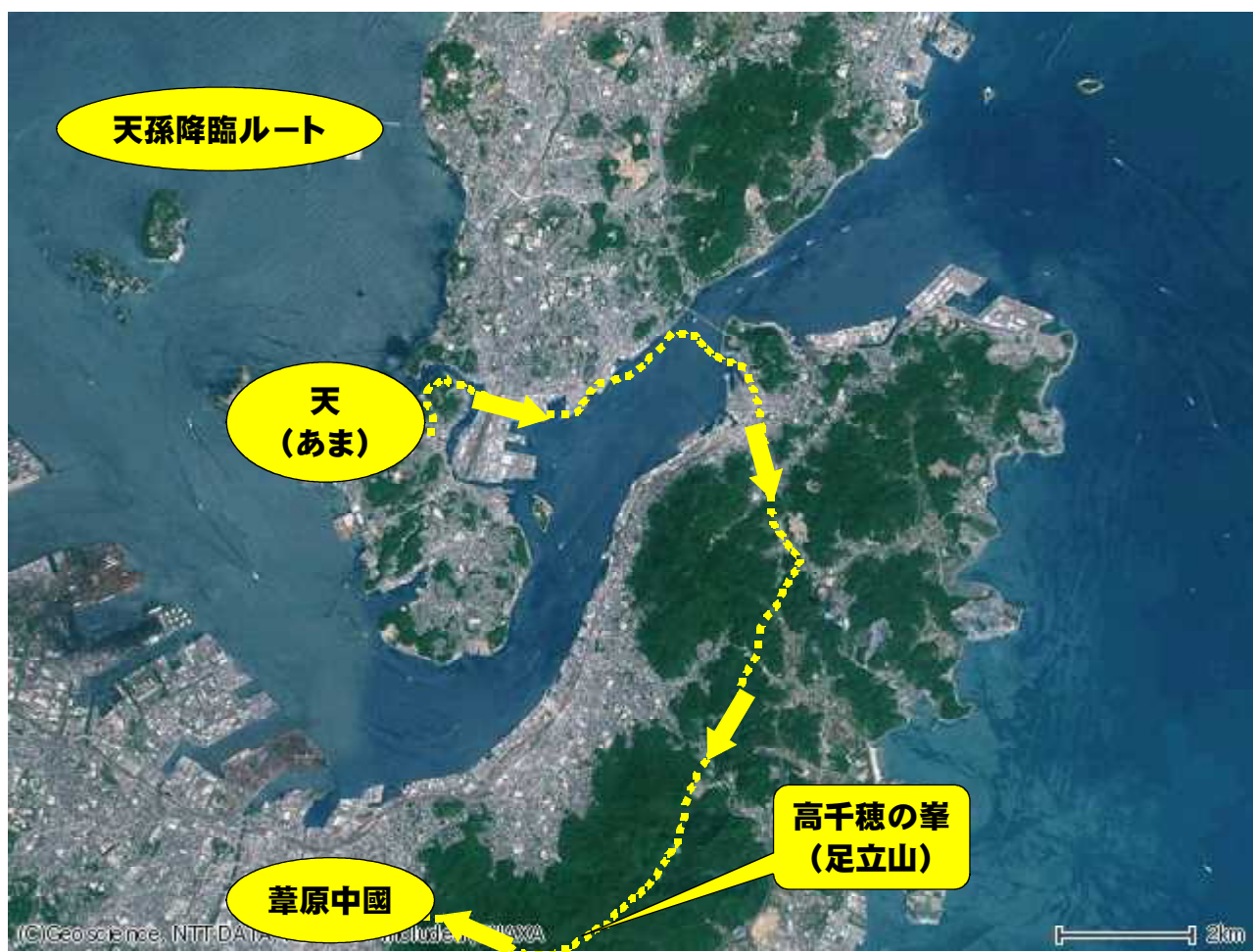
(あまくだ)ります。既にして皇孫の遊行(いでま)す状(かたち)は、穗日(くしひ)の二上(ふたがみ)の天浮橋より、浮渚在平處(うきじまりたひら)に立たして、簀穴(そし)の空國(むなくに)を、頓丘(ひたを)から國覓(くにま)ぎ行去(とほ)りて、吾田(あた)の長屋(ながや)の笠狭崎(かささのみさき)に到ります。(日本書紀卷1)

「千穂」とは稲穂

瓊瓊杵尊が降臨したのは、日本書紀では、「日向の襲の高千穂峯」である。古事記では、「筑紫の日向の高千穂の久士布流多氣」である。どちらも「高千穂」である。「高千穂」は、普通、「高い山」と考えられているが、「千穂」とは山の意味ではない。何故、「高千穂」と呼ぶようになったのか。「日向國風土記」にその地名説話がある。

日向の國の風土記に曰わく、臼杵(うすき)の郡の内、知鋪(ちほ)の郷。天津彦々火瓊瓊杵尊、天の磐座(いわくら)を離れ、天の八重雲を排(おしわけ)けて、稜威(いつ)の道別き道別きて、日向の高千穂の二上(ふたかみ)の峯に天降りましき。時に、天暗冥(くら)く、夜昼別けず、人物道を失い、物の色別き難たかりき。ここに、土蜘蛛、名を大鉏(おほくわ)・小鉏と曰ふもの二人ありて、奏言しく、「皇孫の尊、尊の御手以て、稲千穂を抜いて粃(もみ)と為して、四方に投げ散らしたまはば、必ず開晴(あか)りなむ」とまをしき。時に、大鉏等の奏ししが如、千穂の稲をてもみて粃と為して、投げ散らし たまひければ、即ち、天開晴り、日月照り光きき。因りて高千穂の二上の峯と曰ひき。後の人、改めて智鋪(ちほ)と号く。(日向國風土記)

この日向國風土記とは現在の宮崎県風土記ではない。九州天皇家の「日向」である。「日向」とは「日が向かう場所」、西を意味する。西とはどこから見て西か。その起点は「筑紫」である。「筑紫」も現在の博多ではない。國生み時代の「筑紫」は門司である。「日向」は門司の西の場所をさす。



「千穂」とは山の意味ではなく、文字通り、「千の稲穂」の意である。この名前は瓊瓊杵尊が「日向の二上の山頂」に着いたとき、「天暗冥(くら)く、夜昼別けず、人物道を失い、物の色別き難たかりき。」となり、そこで稲穂を播いたという故事に因んでの地名である。「天暗冥(くら)く、夜昼別けず」となった原因は濃霧である。企救半島足立山は、別名「霧ヶ岳」という。

「日向」とは筑紫國(門司港)から見て「日向(西)」の地域の意である。伊邪那岐命が禊ぎをした彦島小戸は「筑紫の日向の小戸」と表記されている。この「日向」と同じ用法である。「日向」とは筑紫(門司港)の西に当たる彦島、小倉北区一帯をさした。瓊瓊杵尊が降臨した(実際は登ったのであるが)「日向の千穂の二上(ふたかみ)の峯」とは企救半島の足立山と妙見山をいう。瓊瓊杵尊はこの山から小倉北区を見て、眼下に見える葦が國、「葦原中國(小倉北区)」へ降っていったのである。

神武天皇家の遙かなる祖「天之御中主神」

天孫降臨とは「天(彦島)」から新たな海外侵出の物語である。則天武後の名前は「照」である。同じ名前を持つ「高天原」の偉大な女王、「天の照」は一つの決断をする。彦島から九州本土への進出である。この侵出は農業生産力の発展がもたらした結果である。「天(彦島)」における稲作技術の向上は新たな水田を求めているのである。故に、瓊瓊杵尊一行は稲穂(粃だね)を携えていた。天(あま)王朝は彦島から小倉北区へ本拠を移す。これが天孫降臨である。天孫降臨とは「高天原(彦島老の山公園)」から企救半島の高千穂の峯(足立山)を経て「葦原中國(小倉北区)」への侵入であった。当時の小倉北区、紫川河口はその名の通り、葦が生える土地で、稲作に適していたと思われる。ここまでの神話舞台は全て関門海峡の周辺の弥生国家である。

天孫降臨から約百二十年後の王、神武は「高千穂の峯」の麓にあった「高千穂宮」に居た。「高千穂の嶺」とは企救半島足立山である。神武の宮は天(あま)王朝全体から見れば、西の辺に位置する。故に、神武の宮は「西の宮」と呼ばれていた。神武は「天(あま)王朝」のよりよき首都を求めて、王朝内の諸国を歴訪した。この歴訪は政治的な動機からである。この時神武は最初に「筑紫國」を訪れ、次に「安藝國」を訪れている。この「筑紫」「安藝」は旧世界、伊邪那岐命が建国した「大八洲」の「筑紫」「安藝」である。つまり「筑紫」とは門司港、「安藝」とは門司大積である。

神武は「安藝國(門司大積)」での滞在中に一つの決心をする。それが東征であった。神武は王朝の新たな領土を求めて他国を侵略することを決意したのである。その為妻の実家があった「吉備」に渡った。この「吉備」も「大八洲」の「吉備」、つまり彦島西山町である。そこは妻の実家があり、彼らは海の民であった。彼らの助力で、船をつくり、兵を募り、海部一族を引き連れて、神武は「安藝」へ再び戻った。「安藝」は旧世界と侵略を試みる新世界の境界に位置していた。神武は「安藝」から勇躍新世界、祖先神天照大神の加護のない新世界へと攻め込んだのである。その時、「河内國の草香邑の白肩津」で神武一行を迎え撃ったのが「長髓彦」である。

「夫れ、天神の子等の来ます所以は、必ず我が國を奪はむとならむ」といひて、則ち盡に属へる兵を起して、徼りて、孔舎衛坂にして、興に會ひ戦うふ。(神武紀)

緒戦で長髓彦に敗れた神武は「磯城」を倒してのち、再び、長髓彦と戦う。長髓彦は自分が仕えている「櫛玉饒速日命」は、かつて、「天(あま)」から磐船で来た「天神の子」とであると云う。もし、神武が「天神の子」とあるのなら、なぜ、二人も「天神の子」がいるのだと問う。ここはすでに「天神の子」が治めている土地である。それなのに神武は、なぜ、「天神の子」と称して土地を奪おうとするのか。これが長髓彦の言い分である。

門司区吉志には、すでに、「天(あま)」から磐船に乗って来た「櫛玉饒速日命」がいた。磐船とは丸太舟を安定させるために石を舟底に積んでいたので磐船と呼ばれたのであろう。

時に長髓彦、乃ち行人を遣して、天皇に言して曰さく、「嘗、天神の子有しまして、天磐船に乗りて、天より降り止でませり。號けて櫛玉饒速日命と曰す。是吾が妹三炊屋媛を娶りて、遂に兒息有り。名をば可美眞手命と曰す。故、吾、櫛玉饒速日命を以て、君として奉へまつ。夫れ天神の子、豈兩種有さむや。奈何ぞ更に天神の子と称りて、人の地を奪はむ。吾心に推るに、未必為信ならむ」とまうす。

神武は「天神(あまつかみ)の子」と呼ばれている。「天神」とは何か。日本書紀には登場しない。日本書紀神代に初めて現れる神は「國常立尊」である。

古に天地未だ割れず、陰陽分れざりしとき、渾沌れたること鶏子の如くして、溟滓にして牙を含めり。其れ 清陽なるものは、薄靡きて天と為り、重濁れるものは、淹滯いて地と為るに及びて、精妙なるが合へるは搏り易く、重濁れるが凝りたるは竭り難し。故、天先づ成りて地後に定まる。然して後に、神聖、其の中に生れます。故曰はく、開闢くる初に、洲壤の浮れ漂へること、譬へば游魚の水上に浮けるが猶し。時に、天地の中に一物生れり。形葦牙の如し。便ち神と化為る。國常立尊と號す。次に國狹槌尊。次に豊斟淳尊、凡て三の神ます。乾路獨化す。所以に、此の純男を成せり。

日本書紀では最初の神の生誕は「國常立尊」である。次の神が、「壅土瓊尊壅土」、「沙土瓊尊」、「大戸之道尊」、「大苦邊尊」、「面足尊・惶根尊」で、「伊弉諾尊」「伊弉冉尊」へと至る。ところが、古事記神代の始原の神は「天之御中主神」である。この神が「天神」である。

天地初めて發けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神。次に高御産巢日神。

次に神産巢日神。此の三柱の神は、並独神と成り坐して、身を隠したまひき。

次に國稚く浮きし脂の如くして、久羅下那州多陀用幣流之時、葦牙の如く萌え騰る物に因りて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神。次に天之常立神。此二柱の神も亦、獨神と成り坐して、身を隠したまひき。

上の件の五柱の神は、別天つ神。

次に成れる神の名は、國之常立神。次に豊雲上野神。此の二柱の神も亦、獨神と成り坐して、身を隠したまひき。次に成れる神の名は、宇比地邇上神、次に妹須比智邇去神。

次に角杵神、次に妹活杵神。次に意富斗能地神、次に妹大斗乃辨神。次に於母陀流神、次に妹阿夜上訶志古泥神。次に伊邪那岐神、次に妹伊邪那美神。

上の件の國之常立神以下、伊邪那美神以前を、并せて神世七代と称ふ。

古事記の始原の神は、「天之御中主神」・「高御産巢日神」・「神産巢日神」の三人である。続く神は、「宇摩志阿斯訶備比古遲神」・「天之常立神」の二人である。そして、「國之常立神」と「豊雲上野神」の二人の神が続く。日本書紀は「國常立尊」に先立つ五人の神を省略している。どちらが正しいのか。天皇家の祖先神の代表に「天照大神」がいる。この名は「天(あま)」の「照(てる)」という意味を持つ。女王「照」は「天(あま)」を引き継いでいる。この「天(あま)」と古事記始原の神「天之御中主神」の「天(あま)」である。日本書紀は始原の神を「國常立尊」としたが、実は「國常立尊」に先立つ神が居た。それが「天之御中主神」である。神武の時代ではこの神は人々によく知られた存在であった。「天之御中主神」とは何か。記紀では「神代」の時代であるが、通常の歴史学の時代区分で言えば「神代」は弥生時代である。日本の弥生時代に現れた人間、「天之御中主神」とは一体いかなる人物だったのか。解明の手がかりは存在する。

弥生の神 天之御中主神

古事記の始原の神、「天之御中主神」が現れた場所は、「高天原」と書かれている。「高天原」とは「高・天・原」という意である。「高」とは高地性を意味する。「天(あま)」とは「天(あま)之御中主神」という神の名前に由来する。「原」は「ハル」、つまり、集落を意味する。「高天原」とは「天(あま)という神が造った高地性弥生集落」であることを意味する。この弥生集落は、決して、「天上」という觀念の世界ではない。地上に実在した弥生集落である。

始原の神、「天之御中主神」が「高天原」に現れた。彼はそこに弥生集落を建設した。その集落は「天之御中主神」の名前をとって「天(あま)の原(集落)」と呼ばれた。「高天原」という地名が先にあったのではない。小高い丘に、「天(あま)」という名前の神が現れて、弥生集落を作った。故に、その土地が「高・天・原」と呼ばれたのである。「天之御中主神」が現れて弥生集落を建設し、やがて姿を消した。続いて五人の神が現れ、また姿を消した。この五人の神を「五柱の神は、別天つ神」と古事記は解説している。つまり、彼らは「天一族の分派」だったということである。

1 天之御中主神 2 高御産巢日神 3 神産巢日神 4 宇摩志阿斯訶備比古遲神 5 天之常立神
6 國之常立神 7 豊雲上野神

古事記の始原の神は、「天之御中主神」・「高御産巢日神」・「神産巢日神」の三人である。続く神は、「宇摩志阿斯訶備比古遲神」・「天之常立神」の二人である。そして、「國之常立神」と「豊雲上野神」の二人の神が続く。これら七人の神にはある特徴が描かれている。

並独神と成り坐して……………妻がいたが、何かの原因で妻が亡くなった。
身を隠したまひき。……………現れてそして隠れた。彼らは次々と現れては姿を消した。これは彼らが定住しなかったことを意味している。

この七人の神に共通する特徴から浮かぶ人物像はなにか。現代社会においてすぐ思いつくのは旅人である。旅人はやって来て、そして去っていく。だが、この時代に彼らが単純に旅行していたとは想像しにくい。旅行者ではないであろう。では、商人はどうであろうか。商人もまたやって来て、売り、買い、また去っていく。だが、商人は神と畏敬され、畏怖されることはないであろう。

彼らは一体何者なのであろうか。……軍人であった。彼らは軍人であったが、遠くからやって来た、いわば、遠征軍だった。「独神」とは遠征に妻は同行していたが、その妻が死んで、独りになったという意味であろう。また、「身を隠したまひき」とは、隠遁したとか、消えたという不明瞭な出来事ではなく、さらに遠征して行ったという意味であろう。古事記の始原の神、「天之御中主神」は遠征してきた軍人であった。「中主神」とは「中心の主たる神」という表記である。つまり、司令官を意味する。「天之御中主神」とは「天(アマ)」という名の司令官」だったのである。

古事記神代の始原の神、「天之御中主神」はどこから現れたのか。おろん、「天(あま)」とは觀念の「天上」ではない。「天之御中主神」は神であるが、支配者を「お上」という意味で、地上の神である。全ての人にルーツがあるように、「天之御中主神」にもそのルーツがある。そのルーツは古事記神代の記述にもない。「天之御中主神」のルーツは古事記の伝承さえ及ばない遙か古代に遡る。私たちは記・紀さえ及ばない超古代に馳せ遡ってみよう。

松野連姫氏系図の弥生の王

日本皇室の祖は「呉の太伯である」と唱えたのは建仁寺の僧円光である。これに反対して水戸光圀は「大日本史」を編纂したと伝えられる。また、神道の占部も円光に異議を唱え「日本人の氣概」を示したと言われる。

日本に最も古くから定住していたのは縄文人である。彼らは北のルート、南に海上のルート、朝鮮半島ルートを経て日本列島に渡来してきた。そのとき彼らは三々五々ぶらりぶらりとやってきたのではない。彼らは王に率いられ「縄文国家」として渡来してきたのである。当時の居住地域は自然環境に依存するところが大きく、当然生活にとって条件に良いところの争奪戦が繰り広げられた。勝った縄文国家のみが生き残ったのである。

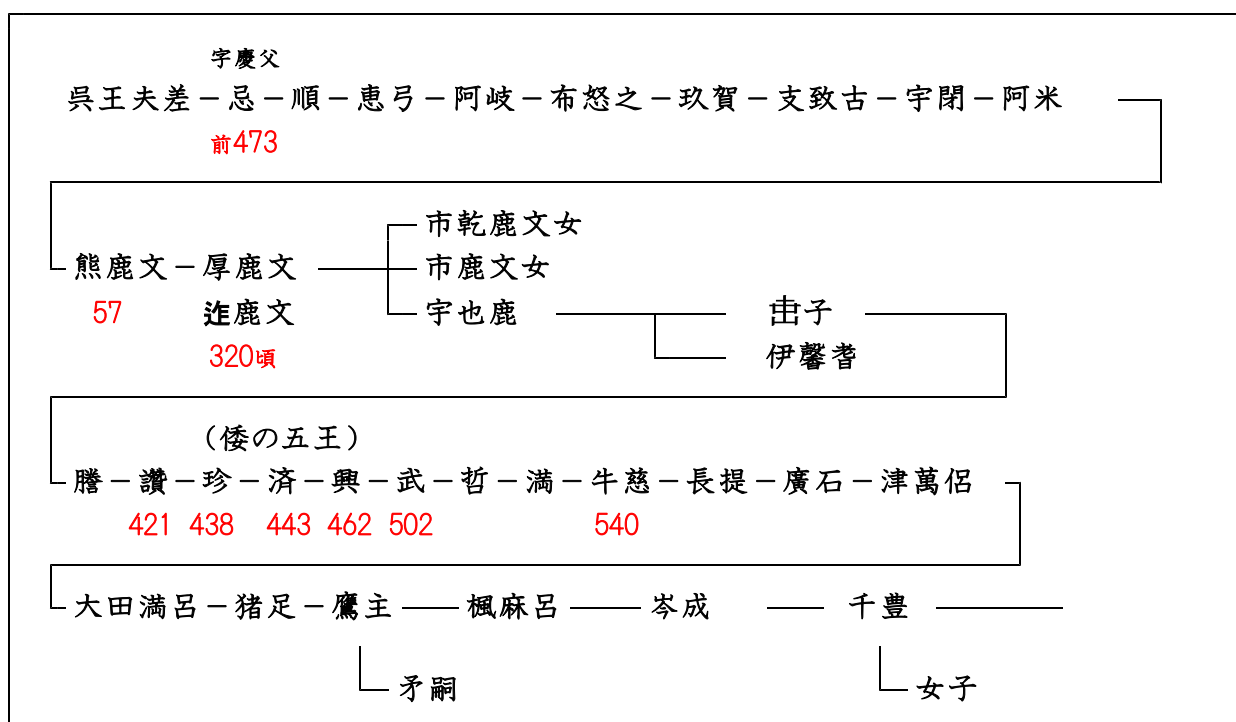
縄文国家に続いて渡来してきたのが弥生国家である。彼らもまた王に率いられ黒潮に乗り渡来してきた。そして最初に建国した弥生国家が佐賀県「吉野ヶ里遺跡」である。この遺跡は規模といい、厳重な防御システムといい、王家の墓といい、どれをとってもどこにでもあるという弥生遺跡ではない。日本の弥生国家として最大最強の国家といえる。「吉野ヶ里」国家を建設した弥生の王とは誰であろうか。解明する史料が存在するのか。幸運なことに八女市在住の稲貝氏が所蔵されているという「松野連姫氏系図」がある。この系図には、古代九州の王家の歴代を次のように記録している。この系図が全ての王を記録しているわけではなく、多くの王の系譜が抜けているが、今、よく知られている記録に基づいて年代(赤字)を記入してみよう。

初代の王「忌」は紀元前473年、祖国、呉が滅亡したのち、黒潮に乗って西九州の菊池郡に渡来してきたと伝わる。彼らが日本に弥生文明を持ち込んだ日本人である。中国春秋時代の「呉」の国の王は「姫氏」という。系図の「忌」は「姫」の卑字である。本来は「姫氏」と書かれるべきである。「姫氏」の創建した国家が「倭(キ)國」である。従って「倭(キ)國」の本来の表記は「姫國」で、訓みは「ワコク」ではなく「キコク」と訓まれるべきであろう。百済本記に日本の国が「貴國(キコク)」と書かれているのは「姫國(キコク)」の訓を正しく伝えていると考えられる。「倭國」は「キコク」と発音されていたことが百済の史料に残っていたのである。

系図には二代目の王、「順」の時に、「委奴(伊)國へ移住した」と傍書きされている。この「委奴(伊)國」が「吉野ヶ里遺跡」である。魏志倭人伝では「伊都国」と書かれているが、元は「委奴國」である。魏志倭人伝の時代には「吉野ヶ里」は終焉を迎え、平野部の佐賀市に移っていた。だが、二代目「順」の時代から九代「阿米」の時代までは「吉野ヶ里」が「委奴國」だったのである。

順－恵弓－阿岐－布怒之－玖賀－支致古－宇閉－阿米まで、これら歴代の王は「委奴國(吉野ヶ里)」から九州各地に遠征し、それぞれ分国を造った。これらの國はその王の名前を以て國名とした。記・紀に度々登場する古代国家は彼らの國である。たとえば、大八洲國生みに登場する「安藝」がそうである。神武紀にもその「安藝」が登場する。「安藝」は姫氏系図、第四代「阿岐」が建国した弥生国家である。日本書紀「神代」の時代にすでに「熊襲國」も登場する。この「熊襲國」は姫氏系図、第十代「熊」の祖が建国した弥生国家である。

彼らが日本の弥生時代の主役である。彼らが弥生時代の日本人である。「忌(姫)」より数えて第九代目の王に「阿米」がいる。「阿米」も「委奴國」から遠征して、弥生国家を建国した。「阿米(あまい)の國」である。この「阿米」が日本の弥生時代の新たな幕を開く。



「太宰府は日本の首都だった」内倉武久著より作成

天之御中主神と第九代の王阿米

「高天原」に現れた始原の神は、「天之御中主神」である。「天(アマ)」とは何か。「阿米」の訛である。超古代の伝承に残された始原の神、「天之御中主神」とは、「委奴國」九代の王、「阿米」である。記紀神話に登場する「天(あま)」とは「阿米(あまい)」の訛である。「天(あま)」とは「天上」を意味するのではなく、姫氏系図第九代の王の名前である。「阿米」は全ての将兵にとって絶対的な存在であった。故に、神と畏敬されたのである。神と畏敬されたのは絶対君主「阿米」である。他に多くの将兵がいたが、彼らは神と畏敬されたのではない。絶対存在は「阿米」一人だった。故に古事記は「天之御中主神と云う神が一人現れた」と書いたのである。だが、実際は彼は「委奴國」の多くの将兵とともに現れたのである。姫氏系図第九代「阿米」は最先端の弥生文明と武器を持つ弥生軍事国家、「委奴國(吉野ヶ里)」の王であった。

私たちは「高天原」に現れた始原の神、「天之御中主神」のイメージを一新しなければならない。この神は通常の意味の宗教的な神ではない。神とは国主。神とは輝く銅剣を佩き、神と畏敬された「委奴國」の王、「阿米」である。神とは百戦錬磨の精鋭軍を引き連れ絶対的な権力を持った偉大なる司令官、「阿米」であった。

天皇家のルーツは「阿米」である。姫氏九代の王、「阿米」が天皇家の始祖である。「阿米」は吉野ヶ里から

遠征し、一つの弥生国家を作った。それが「高天原」である。意味は「高地性・阿米・原(ばる・集落)」である。当時一般に弥生国家は海辺に建設された。つまり、港(水戸)が弥生国家の普通の姿だった。ところが「高天原」は小高い丘に作られた。ゆえに、「高」がつけられた。そしてこの弥生集落に君臨した「天照大神」から神武に至る一つの天皇家の流れが生まれた。

始原の国家「高天原」は彦島老の山

始原の神、「天之御中主神(阿米)」が現れた「高天原」とはどこか。下関市彦島である。「阿米」とその遠征軍は彦島に上陸し、彦島老の山に弥生国家を建設した。それが「阿米の國」、記・紀で「高天原」と呼ばれている弥生国家である。「高天原」とは「高地に存在する阿米が作った原(弥生集落)」という意を持つ弥生国家である。

彦島は関門海峡の要所にある。瀬戸内海の東に侵攻していくためには、ここを押さえなければならない。「倭奴國」の王「阿米」はこの島を重用し、「阿米(天)國」を建設したのである。これが「天國(高天原)」の起源である。「阿米(天)」の作った弥生国家「高天原」の歴史は伊邪那岐命へ、伊邪那岐命から天照大神へ、天照大神からニニギへ、ニニギから神武へと引き継がれていく。彼らが「阿米」の子孫、つまり、天神(あまつかみ)の子孫である。

阿米に始まる神武天皇家

記紀の本文記述には「阿米」の名は現れない。松野連姫氏系図の「阿米」と古事記神話「天之御中主神」を直接結びつける史料はない。だが、幸運にも、古事記に一カ所だけ、「阿米」が現れる。この「阿米」が神武と結び付く。

神武は東征に成功して「倭國」の「畝傍の山」の東南の丘に帝宅を建設した。その後、新たに皇后を迎えることになった。その候補となった娘が「犀川」にいた「伊須氣余理比賣」である。彼女は歌で神武の求愛に答える。その歌が古事記にある。歌を原文で見てみよう。

爾に大久米命、天皇の命を以ちて、其の伊須氣余理比賣に詔りし時、其の大久米命の黥ける利目を見て奇しと思ひて歌曰ひけらく、

阿米都都(あめつつ) 知杼理麻斯登登(ちどりましとと) 那杼佐祁流斗米(などさけるとめ)

とうたいき。爾に大久米命、答へて歌曰ひけらく、

袁登賣爾(おとめに) 多陀爾阿波牟登(ただにあはむと) 和加佐祁流斗米(わがさけるとめ)

故、其の嬢子、「仕へ奉らむ」と白しき。是に其の伊須氣余理比賣命の家、狹井河の上に在りき。

天皇とは神武である。大久米命は神武が彦島で徴兵したときから従ってきた海部一族の長である。

「阿米都都」を「あめつつ」と訓んでいるが、「阿米」は本来「アマイ」と訓むべきである。「阿米」とは姫氏系図の第九代の王「阿米」である。

「阿米都都」は「アマイのト」と訓まれるべきである。「阿米」は「アマイ」であるが、神武の時代には訛って「天(アマ)」として定着していたので、「阿米都都」は「アマノト」と訓んでもよいであろう。

「知杼理」は千鳥である。「麻斯」は「マシ」である。「登登」は「ト」である。訓みは「チドリマシト」である。

「麻」の訓みは「マ」である。「麻(マ)」とは「目」のことである。従って「知杼理麻」は「千鳥目」となる。「斯(シ)」は「為(ス)」の活用形である。「知杼理麻斯登登」の意味は「千鳥目をしたト」である。

「佐祁流」は「サケル」で「割ける」である。「斗米」は訓みは「トマ」である。「米」は「マ」である。「米(マ)」もまた「目」である。「トマ」とは「利目」である。「那杼」は「ナド」である。「ナド」は「何故」「なんぞ」である。「那杼・佐祁流・斗米」の訓みは「ナドサケルトマ」(など割ける利目)である。

伊須氣余理比賣は「阿米(天)のト、千鳥目したト、など割ける利目」と歌ったのである。難しい歌ではない。では、「都都」、或いは「登登」と表記された言葉「ト」とはどんな意味を持つのであろうか。これは文脈からいえ

ば名詞である。現代日本語において最も近いのは「父」ではないだろうか。父親は「とと」「てて」「ちち」と云われる。歌の「都都（登登）」は父の意である「とと」に近いであろう。

“ 阿米(天)の男の人よ、千鳥目をした男の人よ、何故、割ける利目の ”

彼女の歌はこのような質問であった。神武の部下、久米の人々は海部であった。彼らはサメの被害を避けるため入れ墨をするのが伝統であった。彼らは目の周りにも入れ墨をしていた。それが千鳥の目とよく似ている。そこで「伊須氣余理比賣命」はこのように尋ねたのである。彼女は神武が「阿米(天)一族の王」であることを知っていた。だから、神武一行を「阿米(天)のとと」と呼んだのである。神武が「阿米」の子孫であることは広く知られていた事実だったのである。古事記に登場した始原の神、天之御中主神は現地の人々の間では「阿米(アマイ・アマ)」という名で知られていたのである。

「伊須氣余理比賣命」の家は「狭井河」の畔にあった。「狭井」とは百合の花である。神武と「伊須氣余理比賣」は百合の花に囲まれた新居で新婚の一夜を過ごした。なお、この美しい名前の「狭井河」とは、福岡県みやこ町の犀川(現在の今川)である。



神武の北九州東征

神武「倭(やまと)國」は香春町

神武が侵入した土地は「菟田下縣」「菟田縣」と云う名前の行政区であった。この行政区を定めた国家が「倭國(きこく)」である。この「倭國(きこく)」の二人の王は「八十梟師(ヤソタケル)」と名乗った。「タケル」とは「熊襲」の王の伝統的な尊称である。神武が侵入した「倭國(きこく)」は「熊襲(熊氏)」支配の國であった。

「熊襲(熊氏)」とは春秋時代の「楚」の國の王家一族である。この王朝の王は代々「熊」を名乗った。熊襲の國、「楚」は秦軍に鎮圧され、紀元前223年に滅びた。彼らもまた祖国滅亡後、黒潮に乗って九州に渡来して、姫氏と同じように九州各地に建国した。その國が「熊襲(楚)國」である。

「熊襲」の國は古くは古事記國生みに登場する。「筑紫嶋」に存在した四つの古代國の一つが「熊曾國(亦の名を建日別)」である。伊邪那岐命の時代に「筑紫嶋(門司古城山)」にはすでに「熊襲(熊氏)」の國があっ

た。その亦の名は「建日別」である。「建(タケル)」は熊襲の王の名前である。「建日別」とは「熊曾の東の分国」という意味である。この国号は「熊氏」の國であるという表明である。「熊襲」の國は瓊瓊杵尊が天降った山、「日向の襲の高千穂峯」の名前にも現れる。「日向」とは「筑紫(門司港)」を基準として、西を意味する。「筑紫(門司港)」は瓊瓊杵尊がその開拓に生涯を尽くした國であった。瓊瓊杵尊王朝では「筑紫」を中心に東西を云ったのである。「襲」とは「熊襲」を意味する。「高千穂」とは瓊瓊杵尊がその頂上で稲穂をまいた故事に由来する名前である。「日向の襲の高千穂峯」の山頂は「熊襲」が支配していたのである。

神武が侵入した土地は「菟田下縣」「菟田縣」とはどこか。奈良県北東部の宇陀市と比定される。明治以降誤りに誤りを重ねた虚構の神武奈良東征上の比定である。

神武東征とは、北九州を二分していた「姫氏」の一族である神武と「熊氏」との戦いであったということが出来る。神武紀には「渡會縣」・「層富縣」・「磯城縣」等の「縣」が現れる。「縣」とは九州地方の風土記にのみ登場する行政区名である。「渡會縣」・「層富縣」は行橋市、「磯城縣」は田川市にあった「倭國」の行政区である。神武東征はこれらの「縣」における戦いであった。田川市に存在した「倭國」の「熊氏」の王は「姫氏阿米の子」、神武の侵入を知り、「菟田縣」の「國見の丘」で待ち受けた。

「國見の丘」とは神武晩年にこの丘の登り熊襲との激戦地をかえりみたことが由来となった名前で、当時は「伊那佐の山」と言われた。「伊那佐」とは出雲神話に登場する。

是を以ちて此の二はしらの神、出雲國の伊那佐の小濱に降り到りて、十掬劔を抜きて、逆に浪の穂に刺し立て、其の劔の前に胡み坐して、其の大国主命に問ひ言りたまひしく・

出雲神話の「伊那佐」と神武激戦地「伊那佐山」とは同じ場所にある浜辺と山である。「伊那佐山(國見の丘)」とはどの丘か。最古の山城戦が行われた山城跡が存在する。この城とは小倉南区の長野城山である。この山城は、今見ても、小倉南区随一の堅城である。記紀の出雲神話の舞台は島根県ではなく、小倉南区である。小倉南区には「稲葉」という地名が残る。ここが有名な「因幡の白兎」の神話舞台である。

神武は「國見の丘」に立て籠もる「倭國」の二人の「熊襲」の王を巧妙な作戦で破り勝利する。「菟田縣(小倉南区)」の激戦地、長野城山で勝利した神武は周防灘に沿って「層富縣」へ進んだ。「層富縣」とは行橋市に存在した「倭國」の地方行政区である。この「縣」の豪族の一人の名前は「居勢祝」である。「居勢」とは「伊勢」である。行橋市が「古代伊勢」であった。

神武は「古代伊勢」で三人の神官(豪族)を倒し、そのまま、「熊襲」の本国へと侵入した。「熊襲」の二人の王はすでに「國見の丘」で神武によって倒されていた。神武は「倭國(キコク)」を手に入れ、「畝傍山」の東南の丘の柏の林を切り開き、帝宅を建て、国家の樹立を宣言したのである。この「倭國(キコク)」とは香春町である。「畝傍山(ウネビノヤマ)」とは香春岳である。「畝傍山の東南の丘」とは香春町高野である。神武が築いた「檀原宮」とは香春町高野にある貴船神社である。

神武東征記の「縣」は熊襲支配の土地

古代九州各地には姫氏建国の「倭國」と熊氏支配の「熊襲國」がそれぞれに存在していた。神武が侵入した「菟田縣」、「菟田下縣」は熊襲が支配する地方行政区であった。その本国が香春町、田川市に存在した「倭國」である。地方行政区である「縣」は「倭國」行政の基本単位であった。

仁徳紀・雄略記までに登場する「縣」は次の如くである。

＜日本書紀＞

第三卷(神武紀): 菟田下縣・菟田縣・磯城縣

第四卷(綏靖紀～崇神紀): 磯城縣・茅渟縣・十市縣

第七卷(景行紀): 長峽縣・直入縣・子湯縣・諸縣・熊縣・八代縣・高来縣・八女縣

第八卷(仲哀紀): 岡縣・伊觀縣・儼縣

第九卷(神功紀): 松浦縣・山門縣・伊觀縣

第十卷(応神紀): 川嶋縣・上道縣・三野縣・波區藝縣・苑縣

第十一卷(仁徳紀):栗隈縣

<古事記>

神功記:亦末羅縣の玉島里に到り坐して、其の河の邊に御食したまひし時四月の上旬に當りき。

応神記:日向國の諸縣君の女、名は髪長比賣

仁徳記:山縣に蒔ける菰菜も吉備人と共に採めば楽しくもあるか

雄略記:志磯の大縣主の家ぞ

これらの「縣」は全て古代九州に実在した「倭國」の行政区である。これらの「縣」の中で「長峽縣(行橋市)」「八代縣(八代市)」「八女縣(八女市)」「伊觀縣(糸島市)」「松浦縣(松浦市)」「山門縣(山門市)」は現在までその名前が引き継がれている。いずれも九州である。応神記の「日向國の諸縣」とは彦島の「諸縣」である。仁徳記の「山縣」も「吉備」が存在した彦島の「縣」である。記紀に登場する「縣」は全て九州に実在した「縣」である。「縣」の舞台は九州である。神武が「倭國(香春町・田川市)」に都を定めて以来、この天皇家は九州に実在したのである。



神武の年代

神武東征によって、神武を始祖とする九州天皇家が誕生した。その支配地域は祖「阿米」建国の「高天原(彦島)」、天孫降臨の地「豊葦原中國(小倉北区)」、「菟田下縣(小倉南区吉田)」、「菟田縣(小倉南区長野)」、「層富縣(行橋市)」、「犀川(みやこ町)」、倭國(香春町、田川市)である。

神武は弥生人である。神武の時代はいつ頃であろうか。熊襲(熊氏)の祖国「楚」が滅びたのが、紀元前223年である。熊襲は九州有明海に入り、その後、九州各地を転戦して熊襲國(弥生国家)を作った。何代目かの王、熊の時、57年、「後漢光武帝」から金印を授与された。神武東征の時には熊襲(熊氏)は「倭國(香春・

田川)」を支配下におさめていたのであるから、神武東征は紀元前200年を遡ることはない。古事記は各天皇の年齢を書いている。

神武(127)－綏靖(45)－安寧(49)－懿徳(45)－孝昭(95)－孝安(123)－孝霊(106)－孝元(57)－開化(63)－崇神(168)

神武は127歳、崇神は168歳である。この計算方法は二倍歴である。日本書紀の年齢もまた二倍歴で書かれている。日本書紀は在位年を書いているが、これもまた、二倍歴である。

第10代の天皇崇神の崩年については、澁谷雅男氏の研究がある。澁谷雅男氏は崇神の崩年は西暦258年であるという。(「日本書紀を批判する」古田武彦/澁谷雅男)

氏の研究によって日本書紀の在位年数を遡れば、神武の在位を推定することができる。神武は紀元前一世紀後半の人である。金印を授与された「熊」より100年ほど前に古代九州で熊襲の王と戦い生きた弥生人である。

天 皇		年齢(実年齢)	在位年(実在位)	在位期間	崩 年
1	神武	127(63)歳	76(38)年	BC52～BC14	BC14年
2	綏靖	84(42)歳	33(16)年	BC14～AD2	2年
3	安寧	57(28)歳	38(19)年	2～21	21年
4	懿徳	77(38)歳	34(17)年	21～38	38年
5	孝昭	114(57)歳	83(41)年	38～79	79年
6	孝安	137(68)歳	102(51)年	79～130	130年
7	孝霊	128(64)歳	76(38)年	130～168	168年
8	孝元	116(58)歳	57(28)年	168～196	196年
9	開化	115(57)歳	60(30)年	196～224	224年
10	崇神	120(60)歳	68(34)年	224～258	* 西暦258年

*「日本書紀を批判する」古田武彦/澁谷雅男共著 p30

神武「橿原の宮」

神武は紀元前一世紀半ば、「熊襲」支配下の「縣」を転戦し、ついに、「熊襲」の本国に侵入した。そして、「熊襲」本国の象徴である「畝傍山」の東南の丘に帝宅を造って国家樹立を宣言したのである。「畝傍の山」とは香春岳である。北九州東北部を支配下に収めた神武天皇家の始まりであった。神武天皇家は「阿米」を祖とし、九州で発展した一つの天皇家であった。

ご存じのように奈良橿原の宮は明治に明治政府によって建造されたものである。神武が作った「橿原宮」は香春町である。香春町には「神武皇后の墓」が伝わる。

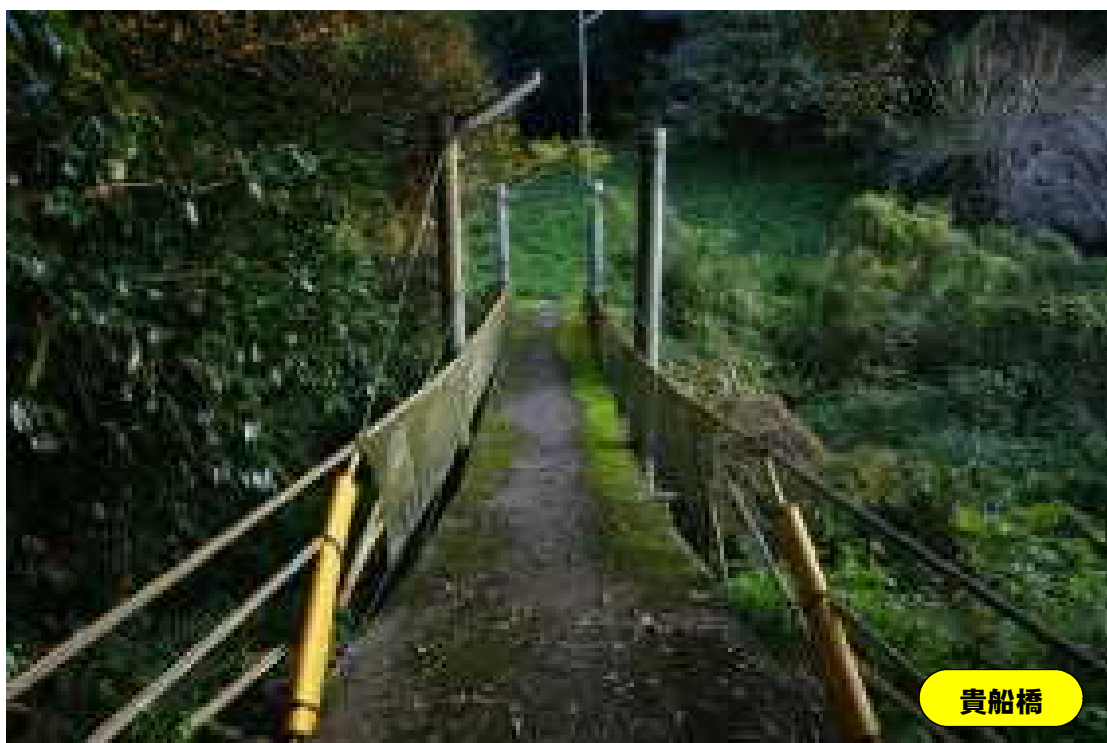
「観れば、夫の畝傍山の東南の橿原の地は、蓋し國の塙區か。治るべし」と神武が述べた橿原宮建造の地は特定できるであろうか。



畝傍山（香春岳）

2016年、私は友人3人と九州天皇家への旅に出かけた。目的の一つは神武橿原宮の発見である。神武橿原宮は神武が「畝傍山」と呼んだ香春町香春岳の東南に必ず存在する。神武は紀元前一世紀の人であるが、橿原宮は天武の時代までは九州天皇家の人々によく知られた宮だった。痕跡は必ず残っている。香春岳の東南には香春町役場がある。またJR日田彦山線の香春駅がある。神武が現代人ならばここに帝宅を建てたであろう。しかし、神武は弥生人である。「熊襲」の王に勝利したとはいえ、その一族は健在、周囲は敵だらけである。いつ襲撃を受けるかわからない。そんな状況で居宅を建てるとしたら、誰だって安全性、防御をまず優先する。従って香春町役場のような平地に建造するはずはない。きっと小高い場所に神武の宮はある。

香春町立勾金小学校の北側に車一台が通るほどの山道がある。山道の両サイドには集落があるが、登り詰めると十軒程の集落がある。眺望は開け、対面に香春岳をみることができる。集落の中の狭い道をさらに登ると道は行き止まりになる。車が5台ほど置ける平らな土地があり、そこから対岸に向けて5、6mほどの吊り橋（貴船橋）がかかっている。吊り橋を渡ったところに神社がある。現在の名前は貴船神社である。神社の北側、西側は5、6mほどの深い谷で小川が流れている。天然の要害とも見えるこの地が九州天皇家の始祖神武が東征の果てに建造した橿原宮の址である。



貴船橋



綏靖～開化の妻は磯城縣(田川市)主の女

神武が皇后に迎えた女性は香春町から大坂山を越えた「犀川(みやこ町)」の豪族の娘である。「倭國」に都を開き住み着いた神武の後継者たちも「倭國(きこく)」の「縣」の豪族の娘を妻としている。日本書紀編者は「綏靖」「安寧」「懿徳」「孝昭」「孝安」が娶った妻の名前を記録している。

- * 2年の春正月に、五十鈴依媛を立てて皇后とす。一書に云はく、磯城縣主の女川派媛なりといふ。一書に云はく、春日縣主大日諸が女系織媛なりといふ。
(日本書紀 綏靖紀)
- * 3年の春正月の5日に、淳名底仲媛命を立てて、皇后とす。一書に云はく、磯城縣主葉江が女川津媛といふ。一書に云はく、大間宿禰が女系井媛といふ。
(日本書紀 安寧紀)
- * 2年2月の11日に、天豊津媛命を立てて皇后とす。一に云はく、磯城縣主葉江が男弟猪手が女泉媛といふ。一に云はく、磯城縣主太眞稚彦が女飯日媛といふ。
(日本書紀 懿徳紀)
- * 29年の春正月の3日に、世襲足媛を立てて皇后とす。一に云はく、磯城縣主葉江が女淳名城津媛といふ。一に云はく、倭國の豊秋狭太媛が女大井媛といふ。
(日本書紀 孝昭紀)
- * 26年春2月14日に、姪押媛を立てて皇后とす。一に云はく、磯城縣主葉江が女長媛といふ。一に云はく、十市縣主五十坂媛といふ。
(日本書紀 孝安紀)

綏靖、安寧、懿徳、孝昭、孝安は「倭國」の「磯城縣」主の女(娘)と結婚している。「磯城縣」は「倭國の磯城邑に磯城の八十梟師有り」と、「菟田縣」の「弟猾」が云った「磯城」である。神武は「倭國」の二人の王を倒して東征を成し遂げた。「倭國」の指導者の一人が「磯城の八十梟師」であった。定住した神武の子孫が妻としたのは「磯城縣」主の娘である。神武の子孫が妻とした女性は神武が倒した「倭國の磯城」の「八十梟師」の一族であった。神武天皇家は土地の豪族と姻戚関係を強め統治を強化していったのである。

九州天皇家と熊襲との戦い

熊襲との戦いは神武東征によって完了したわけではない。神武が戦って勝利したのは九州東北部を支配していた熊襲國の一つに過ぎない。九州天皇家の周囲は「熊襲」の國であった。その國境はしばしば紛争の火種となった。

景行天皇十二年の秋七月に、熊襲反きて朝貢らず。

十二月の五日に、熊襲を討たむことを議る。是に、天皇、群卿に詔して曰はく、「朕聞く、襲國に厚鹿文・迺鹿文といふ者有り。是の兩人は熊襲の渠師者なり。衆類甚多なり。是を熊襲の八十梟師と謂ふ。其の鋒當るべからず。師を興すこと少くは、賊を滅すに堪へじ。多に兵を動かさば、是百姓の害なり。何か鋒刃の威を假らずして、坐づからに其の國を平けむ。」とのたまふ。時に一の臣有り。進みて曰はく、「熊襲梟師、二の女あり。兄を市乾鹿文と曰す。弟を市鹿文と曰す。容既に端正し。心且雄武し。重き幣を示せて麾下に擒納るべし。因りて其の消息を伺ひたまひて、不意の處を犯さば、會て刃を血さずして、賊必ず自づから敗れなむ。」とまうす。天皇詔はく、「可なり」とのたまふ。是に、幣を示せて其の二の女を欺きて、幕下に納る。天皇、則ち市乾鹿文を通して陽り寵みたまふ。時に市乾鹿文、天皇に奏して曰さく、「熊襲の服はざることをな愁へたまひそ。妾良き謀有り。即ち一二の兵を己に従へしめたまふべし。」とまうす。而して家に返りて、多に醇き酒を設けて、己が父に飲ましむ。乃ち酔ひて寐ぬ。市乾鹿文、密に父の弦を断つ。爰に従へる兵一人、進みて熊襲梟師を殺しつ。天皇、則ち其の不孝の甚しきことを惡みて、市乾鹿文を誅す。仍りて弟市鹿文を以て、火國造に賜ふ。

日本書紀卷7景行天皇

「熊曾」の王の名前は「厚鹿文」である。名は「厚」、字が「鹿文」である。「熊曾」の王は一字名を名乗っていた。天皇家と「熊曾」との関係は、「熊襲反きて朝貢らず」に表れている。九州天皇家が上、「熊曾」が下という上下関係にあった。この上下関係は天皇家の遠祖、「姬氏」と「熊氏」との関係に遡るであろう。景行天皇は九州天皇家の天皇として熊襲と戦ったのである。

卷17～卷27 日本國天皇家の代

日本書紀を編纂した持統朝の史官は九州天皇家出身であった。彼らは九州天皇家史には詳しくはなかったが奈良日本國天皇家の歴史には明るくなかった。卷第十七繼体天皇以降は記述にまちがいが多い。また史料不足のため百濟本紀などを援用している。特に卷第十九欽明天皇紀は海外文献で埋め尽くされている。繼体天皇以降の日本書紀の歴史記述は日本國天皇家の歴史であるにも関わらず、九州天皇家編者の視点、歴史観に立って編纂されているため歪められている。最も歪められた天皇紀は卷二十二推古天皇(554年～628年)である。推古紀だけでは検討のしようもないが、幸い同時代の史料がある。「隋(581年～618年)書」である。隋書と推古紀、この二つを比較参照して真実の日本國天皇家史を復元してみよう。

(1)隋書第81卷列伝東夷伝倭國

皇帝	名	統治年	元号	遣隋使
文帝	楊堅	581～600 601～604	開皇 仁寿	600年第一回遣隋使
煬帝	楊広	605～618	大業	607年第二回遣隋使 608年文林郎裴清来日
恭帝侑	楊侑	617～618	義寧	
恭帝侗	楊侗	618～619	皇泰	

隋書は本紀5卷、志30卷、列伝50卷からなる。列伝第46は「東夷 - 高麗・百濟・新羅・靺鞨・琉求・倭國」に関する記事である。ここに「倭國」「倭王」が登場する。「倭王」とはだれか。「倭國」とはどこか。

開皇二十年、倭王姓阿每、字多利思比孤、號阿輩雞彌、遣使詣闕。上令所司訪其風俗。使者言倭王以天為兄、以日為弟、天未明時出聽政、跣趺坐、日出便停理務、云委我弟。高祖曰：「此太無義理。」於是訓令改之。

「魏志倭人伝」岩波文庫

開皇二十年(文帝・600年)、倭王は姓は阿每(アマイ)、字は多利思比孤(タリシヒコ)、阿輩雞彌と号した。使を遣わして闕(隋都長安)に詣る。上(文帝)は役人(係官)にその風俗を尋ねさせた。使者は、「倭王は天を兄とし、日を弟とす。天が未だ明けない時、出て政を聴く。あぐらをかいて坐り、日が出れば、すなわち政務を停め、我が弟に委ねる」と云う。高祖(文帝)は「これはおおいに義理がないことだ」と曰く。是に訓令し、これを改めさせた。

大業三年(煬帝・推古十五年・607)、其王多利思比孤遣使朝貢。使者曰：「聞海西菩薩天子重興佛法、故遣朝拜、兼沙門數十人來學佛法。」其國書曰「日出處天子致書日沒處天子無恙」云云。帝覽之不悅、謂鴻臚卿曰：「蠻夷書有無禮者、勿復以聞。」

「魏志倭人伝」岩波文庫

大業三年(607年)、その王の多利思比孤が遣使を以て朝貢。使者が曰く「海西の菩薩天子、重ねて仏法を興すと聞き、故に遣わして朝拝させ、兼ねて沙門数十人を仏法の修学に来させた」。その国書に曰く「日出ずる處の天子、書を日没する處の天子に致す。恙なきや」云々。帝はこれを見て悦ばず。鴻臚卿が曰く「蛮夷の書に無礼あり。再び聞くことなかれ」と。

- (1) 第一回遣隋使は600年。隨の皇帝は文帝である。文帝は隨の初代皇帝である。この遣隋使は隨建国の祝賀大使である。
- (2) 「倭王」の名前は「阿每(アマイ)」である。「阿每」とは「阿米」である。600年に遣隋使を派遣した「倭國」の王は「阿每」と名乗った。この「倭國」の王「阿每」は彦嶋に「天」を建国した姫氏松野連 系図の第九代の王、「阿米」一族ということになる。
- (3) 607年に遣隋使を送った倭國の王も「阿每」である。この時の隋皇帝は煬帝である。この遣隋使は煬帝即位の祝賀大使である。「倭國」の王は自らを、「日出ずる處の天子」と国書に書いた。この「天子」とは隋皇帝を「海西の菩薩天子」と表現しているように、仏教上の表現である。「倭王」は仏教に帰依していた。故に、隋皇帝を「海西の菩薩天子」と尊称し、自らを、「(海東の菩薩)天子」と表現したのである。中国皇帝を「天子」と呼ぶ政治的表現と異なる。煬帝の不機嫌は当たらない。
- (4) 隋書には「倭國」への行路が記されている。「倭國」の位置を明らかにしておこう。

「倭國」の位置

明年、上遣文林郎裴清使於倭國。度百濟、行至竹島、南望耽羅國、經都斯麻國、迴在大海中。又東至一支國、又至竹斯國、又東至秦王國。其人同於華夏、以為夷洲、疑不能明也。又經十餘國、達於海岸。自竹斯國以東、皆附屬於倭。

翌年、上(天子)は文林郎裴清を使者として倭國に遣した。百濟に渡り、行きて竹島に至る。南に耽羅國を望み、都斯麻國を経る。対馬は廻か大海の中に在り。また東に一支國に至る。また竹斯國に至る。また東に秦王國に至る。その人は華夏(中華)と同じ、以て夷洲となすも、疑うらくは、あきらかにする能わざるなり。また十余國を経て海岸に達す。竹斯國より以東は、皆倭に附屬する。

* 竹島

竹島は現在の竹島ではない。「竹島は南望耽羅國」という。南に耽羅國、つまり済州島が見えるというのである。「竹島」とは「完島」であろう。「倭國」への行路は、魏志倭人伝に記された「邪馬台國」への行路と異なる。これが第一に押さえるべきポイントである。隋書の「倭國」行路は韓国内陸行はない。全て海路である。文林郎裴清(ハイセイ)は「完島」から東へ進み「一支國(壱岐)」に到着したのである。従って「東至一支國」という方向は妥当なのである。

＊竹斯國

竹斯國とは博多である。文林郎裴清は博多から「又東至秦王國」と東進して「秦王國」に到着している。従って、この海路は瀬戸内海である。「秦王國」は確定はできないが、周防上関であろうか。「又經十餘國、達於海岸」という海岸は大阪難波である。難波宮が存在した大阪天満である。難波とは難波吉士雄成の國であるから難波という地名である。

＊自竹斯國以東、皆附屬於倭

博多より以東の国々は全て「倭國」に属している。九州博多から東の国々、瀬戸内海沿岸の国々は全て「倭國」に属している。「倭國」の位置は九州ではないことは自明である。「倭國」とは関西の國である。



隋書「倭國」は九州の國ではなく、瀬戸内海を東に進んで到る関西の国家である。この国は魏志倭人伝が記録した「邪馬壹国」と異なる。「邪馬壹国」は倭人伝の記した方角、距離(短里)を正確に検証すれば九州八女に存在した国である。中国史書に残る「倭國」はその時の中国王朝と国交のあった日本の国を記録した。隋の国交のあった「倭國」は奈良の国家で、魏と国交のあった「倭國」は九州の国家である。

関西に存在した「倭國」の王は「阿每」と名乗り、仏教に帰依していた。故に国書に自らを「日出ずる處の天子」と署名したのである。すでに述べたが「天子」とは「菩薩天子」という意味の仏教用語である。「阿每」は仏教に帰依した国王であった。

隋は「阿每」の性別をどう認識していたか。隋書は「阿每」の字を「多利思比孤(タリシヒコ)」と書き留めている。「多利思比孤(タリシヒコ)」は男性の名前である。600年と607年に遣隋使を派遣した「倭国」の王「阿每」は男性で、仏教に帰依した国王であった。この時、日本書紀の天皇は「推古天皇」である。日本書紀は推古在位を欽明15年(554年)から推古36年(628年)としている。隋書に記録された「倭国王・阿每」と日本書紀推古天皇とは明らかに食い違う。隋書の倭王の姿が正しいのか、日本書紀推古女帝の姿が正しいのか。

倭王遣小徳阿輩臺、從數百人、設儀仗、鳴鼓角來迎。後十日、又遣大禮哥多毗、從二百餘騎郊勞。既至彼都、其王與清相見、大悅、曰：「我聞海西有大隋、禮義之國、故遣朝貢。我夷人、僻在海隅、不聞禮義、是以稽留境內、不即相見。今故清道飾館、以待大使、冀聞大國惟新之化。」清答曰：「皇帝德並二儀、澤流四海、以王慕化、故遣行人來此宣諭。」既而引清就館。其後清遣人謂其王曰：「朝命既達、請即戒塗。」於是設宴享以遣清、復令使者隨清來貢方物。此後遂絕。

倭王は小徳の阿輩臺を遣わし、從者數百人、儀仗を設け、鼓角を鳴らして來迎した。十日後にまた、大禮の哥多毗を遣わし、二百餘騎を從えて郊外で慰勞した。既に彼の都に至り、その王、裴清と相見え、大いに悦び、曰く、「我、海西に大隋、禮儀の國ありと聞く。故に遣わして朝貢した。我は夷人にして、海隅の辺境では禮儀を聞くことがない。これを以て境内に留まり、すぐに相見えなかった。今、道を清め、館を飾り、以て大使を待ち、願わくは大国惟新の化を聞かせて欲しい」。裴清が答えて曰く、「皇帝の徳は二儀に並ぶ、四海に流れ、以て王に慕化する。故に使者を來たらしめ、ここに諭を宣す」。既に裴清は引き上げて館に就く。その後、裴清が人を遣わして、その王に曰く「朝命は既に伝達したので、すぐに道を戒めることを請う」。ここ於いて宴を設け、裴清を遣わして享受させ、再び使者を裴清に隨伴させて方物を貢獻させに來た。この後、遂に途絶えた。

* 608年の隋の使者は文林郎裴清である。三国史記卷27・百濟本紀武王九年も隨の使者は文林郎裴清だと記録している。ところが推古紀は「十六年、大唐の使人裴世清・下客十二人・妹予臣に従ひて、筑紫に至る。難波吉士雄成を遣して、大唐の客裴世清等を召す。唐の客の爲に、更新しい館を難波の高麗館の上に造る」と、使者は唐・鴻臚寺の掌客裴世清と記録している。明らかな誤謬である。608年中国王朝は隋である。

三国史記卷27・百濟本紀武王九年(大業四年)

使を遣わして隋に入り朝貢す。隋の文林郎裴清、使を倭國に奉じ、我が国の南路を経たり。

ここには倭王の姿が生き生きと描かれている。倭王は隨使裴清に使者を遣わして歓待した。使者の官位、名は「小徳阿輩臺」である。官位「小徳」については推古11年12月に「始めて冠位を行ふ。大徳・小徳・大仁・小仁・大禮・小禮・大信・小信・大義・小義・大智・小智・会わせて十二階」とある。小徳阿輩臺は倭國官位第二位の高官である。倭王名「阿每(ア・マイ)」は「阿」が姓で「每」は名である。使者の名「阿輩臺(ア・ハイロウ)」も姓が「阿」である。阿輩臺は倭王と姻戚関係にあった高官であろう。倭王は隋の使者文林郎裴清と会い「冀聞大國惟新之化」と願いを述べた。これは倭國の国王としての会見である。

このように隋書に記述された倭國の男王の姿は推古紀と大きく異なる。推古紀は冒頭「皇后、豐浦宮に即天皇位す」とある。明らかに女帝である。推古紀には「天皇」が26回表れる。この「天皇」が女帝推古をさすのか、また隋書を記録した倭國王をさすのか、あるいは別の人物をさすのか、これから明らかにしていくことになるが、もし隋書倭王の記録が国内のどこかに残されていれば、隋書倭王の実像に迫ることができる。

思いがけないところに隋と同時代の王の記録が残されていた。法隆寺金堂釈迦三尊光背銘である。

法隆寺金堂の釈迦三尊佛光背銘

法隆寺金堂釈迦三尊光背銘には次の文が彫られている。

法興元三一年歲次辛巳十二月鬼前太后崩

明年正月二二日上宮法皇枕病弗愈

于食王后仍以勞疾並著於床

時王后王子等及與諸臣深懷愁毒共相發願

仰依三寶當造釈像尺寸王身

蒙此願力轉病延壽安住世間

若是定業以背世者往登浄土早昇妙果

二月二日癸酉王后即世 翌日法皇登遐

癸未年三月中如願敬造釈迦尊像并俠侍及莊嚴具竟

乗斯微福信道知識現在安穩出生入死隨奉三主紹隆三寶遂共彼岸

普遍六道法界含識得脫苦緣同趣菩提

使司馬鞍首止利佛師造

(法隆寺金堂釈迦三尊光背銘)

堂々たる漢文である。読み下してみよう。

法興の元(はじめ)より三十一年(621)、歳次未巳十二月、鬼前太后崩ず。

明年(622)正月二十二日、上宮法皇、病に枕して、愈(こころよ)からず。

干食王后、仍(より)て以て勞疾し、並びに、床に著く。

時に王后、王子等、及び諸臣、深く愁毒(しゅうどく・うれい)を懷(いだ)き、共に相發願(ほつがん)す。

三宝を仰ぎ依りて、當(まさ)に尺寸王身(しゃくすんおうしん)の釈像を造るべし。

此の願力(がんりき)を蒙(こうむ)り、病を転じ、寿(よわい)を延べ、世間に安住せんことを。

若(も)し是れ定業(じょうごう・前世からの定め)にして、以て世に背かば、往きて淨土に登り、早く妙果(みょうか・悟り)に昇らんことを。

二月二日、癸酉、王后即世す。翌日法皇、登遐す。

癸未年(623)、三月中(に)、願の如く、釈迦尊像并(なら)びに狹侍及び莊嚴の具(光背と台座)を敬造し竟(おわ)りぬ。

斯(こ)の微福(みふく)に乗(よ)り、信道の知識(道を信じる施主)、現在には安穩にして、生を出でて死に入らば三主(鬼前太后・上宮法皇・王后)に隨(したが)ひ奉り、三寶を紹隆(しょうりゅう)し、共に彼岸を遂げ、六道に普遍(輪廻)する法界(宇宙)の含識(衆生・人々)も、苦縁を脱するを得て、同じく菩提に趣かん。

使司馬鞍の首(長)・止利佛師、造る。

(参考 <http://ja.wikipedia.org/wiki/>)

光背銘は法隆寺金堂釈迦三尊敬造の縁起である。難解な漢文である。その上、難解な仏教用語が使用されている。まずいくつか解説が要る。

* 鬼前太后

鬼前(かむさき)太后については諸説があるが、鬼前は太后の父がいた宮の地名である。鬼前とは普通の漢字では神前(かむさき)である。太后はこの宮にいたので鬼前(神前)太后と呼ばれていた。太后とは王の母を表わす言葉である。

* 上宮法皇

法皇とは仏法に皈依した天皇の称号である。つまり「上宮」は現世では天皇である。

* 干食王后

干食王后の訓みが難しい。定説はない。通常「かしわで王后」と訓まれて、「かしわで」は王后の名前と理解されている。しかし、この訓みは無理がある。また「干食」を「かしわで」と訓むのは例がない。「干」は「干す」という動詞である。「干食」は「食を干す」と訓む。「食が喉を通らない」の意である。よく似た用法に「断食」がある。「断食」は「食を断つ」である。「干食王后」は「干食」と「王后」と二つに分ける。「食が喉を通らなく、王后は」と訓むべきである。

* 王后仍以勞疾並著於床

上宮法皇が病氣となった。心配で心配で食事が喉を通らない。「仍(より)て以て」、それが原因で「王后」(上宮法皇の妻)もまた「勞疾」し、同じく、病床に著いた。

元号とはその時代が始まる「元(始め)の号(名前)」という意味である。故に、元号なのである。「法興」という元号が始まって31年経った621年12月、王の母、神前太后が亡くなった。その翌年の622年正月22日、上宮法皇が病となり、臥せった。そのため王后は心配のあまり食が喉を通らず体調をくずし、同じく病床についた。そこで王后と王子、諸臣は王と同じ身丈の釈迦像をつくることを發願した。ところが、二ヶ月後の2月21日に王后が亡くなり、翌日2月22日に上宮法皇が亡くなった。翌年623年3月に發願の通り、釈迦像と狹侍、光背と台座を造った。仏像作製者は「使司馬鞍首止利佛師」である。

上宮法皇と隋書倭王

法隆寺法隆寺金堂釈迦三尊光背銘の「上宮法皇」について人物像と隋書倭王の人物像を重ねてみよう。

- (1) 上宮法皇は天皇である。隋書は「其王多利思比孤遣使朝貢」と国王であると認識している。日本書紀が描く推古「摂政」の姿ではない。
- (2) 上宮法皇はその治世の元号を「法興」と定めた。法興年間は591年から622年である。隋書遣隋使は600年と607年で、これは上宮法皇の治世である。
- (3) 上宮法皇は仏教を深く信仰し、自ら帰依した。故に「天皇」を名乗らず、「法皇」と名乗った。隋書は倭國の使者が「海西の菩薩天子、重ねて仏法を興すと聞き、故に遣わして朝拝させ、兼ねて沙門数十人を仏法の修学に來させた」と述べたと記録する。隋書倭王も上宮法皇も仏教への信仰心が篤い。
- (4) 上宮法皇には母(太后)、妻(王后)、子(王子)がいる。隋書は倭王が男性であると認識して、字を「多利思比孤」と記録している。多利思比孤は伝統的に男性の字である。

上宮法皇人物像と隋書倭王人物像は完全一致する。法隆寺法隆寺金堂釈迦三尊光背銘に残された上宮法皇は591年から622年まで日本(倭國)の天皇であった。初めて遣隋使を派遣し、隋との国交を結んだ。推古紀は大きく改竄されている。推古紀の554年～628年とはほぼ重なる時期、奈良日本國天皇家の天皇は推古ではなく、上宮法皇である。

光背銘に書かれた「法興」とは元号である。だが、「法興」については私見とは異なる二つの見解がある。

- (1) 「法興」は私元号である。

崇峻の代も推古の代も元号を定めていない。天皇家で元号が制定されたのは天武の代の「朱鳥」が初めてである。従って、法隆寺釈迦三尊光背の法興は私的な元号である。上宮法皇は私的に元号を法興と定めたのだ。

- (2) 「法興」は九州王朝の元号である。

「法興」とは私的な元号ではない。国家の元号である。だが、「法興」は天皇家の元号ではなく、他の王朝の元号だ。つまり、九州王朝の元号である。(古田武彦)

日本書紀では、天武が「朱鳥」という元号を定めたと記録されている。では、天武まで日本には元号がなかったのか。646年に発布された大化の改新の詔がある。この「大化」とは元号である。「朱鳥」以前に元号がなかったのではない。では、なぜ、日本書紀は天武の「朱鳥」が最初の元号だとの記録したのか。

天武が元号「朱鳥」を定めたのは、天武が壬申の乱に勝利して、「天皇位」に就いた後である。日本書紀はこの即位を「初めて天位についた」と記述している。その意味は、それまでは奈良の日本國天皇家が代々「天位」に就いていたが、九州天皇家として天武が「初めて天皇となった」という意味である。そうして、天武は九州天皇家の天皇として初めて元号「朱鳥」を定めた。天武の元号制定は九州天皇家として最初だという意味である。日本書紀は元号を用いていない。日本書紀を編纂した九州天皇家出身の史官にとって元号を使いたくても九州天皇家には元号がなかったからである。

古来、元号を定める権限は奈良日本國天皇家にあった。「上宮法皇」はこの権限に基づき、自らの治世を「法興」と定めた。「法興」とは「仏法が興る」という意味である。仏教を導入し、自ら帰依し「法皇」と名乗った「上宮法皇」の世に相応しい元号である。

古田武彦氏の見解も天武が初めて元号「朱鳥」を定めたという通常の認識に立っている。故に「法興」は奈良天皇家の元号でなく、「九州王朝の元号だ」と解説した。では「九州王朝」とはなにか。「上宮法皇は九州王朝の天皇である」ことを史料を基に証明しなくてはなるまい。

隋書及び法隆寺金堂釈迦三尊光背銘が指し示す事実はこのようになる。

- (1) 法興は奈良天皇家の元号である。この元号を定めた天皇は上宮法皇である。

もし法興が私元号であったならば他国の史料には掲載されまい。ところが伊予国風土記逸文に法興が記録されている。伊予(松山)の風土記に「法興六年」の記事がある。法興は私的な元号ではない。伊予(松山)を含め奈良天皇家の統治下にあった国々で広く使われていた元号であった。

なお法興元年は591年である。

- (2)法興を定めた天皇は奈良天皇家の上宮法皇である。推古天皇ではない。法興とは「仏法を興す」という意味の元号である。上宮法皇は仏法導入の為に戦い、591年即位し、その治世を「法興(仏法を興す)」と定めた。元号法興には上宮法皇の治世理念が込められている。上宮法皇は法興年間(591年～622年)奈良日本國天皇家の天皇であった。

日本國天皇上宮法皇と法興寺

元号法興についてもう少し追求してみよう。崇峻紀に「法興」を寺号とした寺の造営記録がある。法興寺である。

崇峻天皇1年秋7月、蘇我大臣、亦本願の依に、飛鳥の地にして法興寺を起つ。

「法興寺」は「法隆寺」や「法起寺」と同様な寺の一つであるかのように見えるが、見てきたように「法興」とは元号である。法興寺は単なる一寺院ではなく、法興の代を象徴する寺院であろう。この法興寺がどのような寺だったのか長く不明であった。昭和31年5月、奈良明日香「安居院」敷地の発掘調査が始められた。ここに法興寺が存在したからである。

まず、飛鳥寺(法興寺)を発掘調査することになって、それがどのようなところか数人の人々と見に行った。飛鳥村を南に出はずれたところの右側に、水田にかこまれた安居(あんご)院という小さな御堂があった。現在は真言宗の寺となっているが、その本堂は、飛鳥大仏とよばれる金銅釈迦佛のおわしますところとして知られている。鞍作鳥の作品であるこの御本尊は、いまは満身創痍、お顔も何回もの修繕でつぎはぎだらけになり、その由緒はともかくも、まったく気の毒な姿になりはてている。本堂の裏には、一見その付近にも多い藁屋根の農家そのままのような庫裡、本堂の右の小さな観音堂、その南、すなわち境内の南西の隅に鐘楼が見られる。この荒れはてた安居院境内や、その西に接した畑から古い瓦がでてくことは、和尚や、二、三の蒐集家が熱心に集められたものなどからわかっていたが、そのほか、どんな遺構があるのかはほとんど知られていなかった。

「飛鳥寺」中央公論美術出版・坪井清足著

こうして調査が始まった。以下、発掘された遺構を、順に、書き記してみよう。

- (1) 地下60cmに南北に並んだ基壇石
- (2) 金堂は正面21.2m、奥行17.5m
- (3) 塔と思われる一辺7mの正方形の建物跡
- (4) 西金堂は東西14.8m、南北19.3mの建物
- (5) 東金堂
- (6) 中門は正面16.7m、奥行13.3m
- (7) 回廊は柱間一間の単廊、塔の中心線から110mの位置にある
- (8) 南門は正面10.5m、奥行き8.4m
- (9) 塔基壇の地中に金銅製の舍利容器
- (10) 講堂

発掘された遺構が法興寺の遺構である。法興寺は驚くことに、一塔三金堂の高句麗様式の寺だった。日本書紀にはこの法興寺についての造営記事がある。

587年 蘇我大臣、亦本願の依に、飛鳥の地にして、法興寺を起つ。

588年 崇峻天皇即位。飛鳥の衣縫造が祖樹葉の家を壊して、始めて法興寺を作る。

589年

590年 冬10月に山に入りて寺の材を取る。
591年
592年 10月に、大法興寺の仏堂と歩廊とを起つ。
11月3日乃ち東漢直駒をして崇峻天皇を弑せまつらしむ。
12月8日に、皇后(推古天皇)、豊浦宮に即天皇位す。
593年 元年の正月15日に、佛の舍利を以て法興寺の刹の柱の礎の中に置く。
元年の正月16日に、刹の柱を建つ。
夏4月10日に、厩戸豊聡耳皇子を立てて、皇太子とす。
594年
595年
596年 推古4年の冬11月に、法興寺、造り竟りぬ。
597年
598年
599年
600年
601年
602年
603年
604年
605年 夏4月の朔に、天皇、皇太子・大臣及び諸王・諸臣に詔して、共に同じく誓願ふことを發て、始めて銅・繡の丈六の仏像、各一軀を造る。乃ち鞍作鳥に命せて、仏造りまつる工とす。是の時に、高麗國の大興王、日本國の天皇、仏像を造りたまふと聞きて、黄金三百兩を貢上る。
606年 夏4月8日に、銅・繡の丈六の仏像、並に造りまつり竟りぬ。是の月に、丈六の銅の仏を元興寺の金堂に坐せしむ。
621年 2月5日、厩戸豊聡耳皇子命、斑鳩宮に薨りましぬ。是の月に上宮太子を磯長陵に葬る。
628年 推古天皇崩御

法興寺の施主は上宮法皇

「法興」は元号である。法興の世に造営された。故に「法興」という寺号となった。では、法興寺造営施主は誰か。日本書紀では蘇我氏である。

587年蘇我大臣、亦本願の依に、飛鳥の地にして、法興寺を起つ。

だが推古13年に別の記事がある。

推古13年(605年)夏4月の朔に、天皇、皇太子・大臣及び諸王・諸臣に詔して、共に同じく誓願ふことを發て、始めて銅・繡の丈六の仏像、各一軀を造る。乃ち鞍作鳥に命せて、仏造りまつる工とす。是の時に、高麗國の大興王、日本國の天皇、仏像を造りたまふと聞きて、黄金三百兩を貢上る。

高句麗国王大興王は日本國の天皇が仏像を敬造するとを聞いて、黄金三百兩を寄進した。この仏像とは、むしろ、「法興寺」の本尊佛である。「法興寺」建立と「仏像」敬造は一体のものである。寺を作って本尊がないということはない。また、本尊を作って寺がないということもない。「寺と本尊」は一つのものである。従って、高句麗の「大興王」は「法興寺」建立も「釈迦佛」敬造も日本國の天皇だと認識していたのである。この天皇とは「推古」ではない。「法興寺」を建立し、丈六の黄金の釈迦佛を敬造した天皇は日本國天皇上宮法皇である。

黄金を使って作られたこの丈六の黄金佛は「法興寺」の本尊として造られた。「法興寺」の建築様式は高句麗様式、塔を中心に西、東、北の三金堂を持つ大寺院であった。本尊は北金堂に安置されていたと思われる。「法興寺」は上宮法皇が即位して元号を「法興」と定め、起工した寺院だった。大工を指揮した棟梁は蘇我

氏であったが、施主は天皇、上宮法皇である。この上宮法皇を高句麗大興王は「日本國の天皇」と呼んでいたのである。

この時、鞍首止利が造った丈六仏像とは飛鳥「安居院」に現存する「釈迦如来像(飛鳥大仏)」である。「安居院」は「法興寺」の北金堂の跡地に建っている。なお、推古紀の「鞍作鳥」は実名ではない。実名は、釈迦三尊光背に自ら書いた「使司馬鞍首止利」である。「鞍作鳥」は推古紀編者の誤謬である。

「使司馬鞍首止利」が敬造した釈迦佛は、「法興寺本尊金銅釈迦佛」と「法隆寺釈迦三尊」である。どちらも釈迦佛である。「法隆寺釈迦三尊」は光背銘にある如く、尺寸王身の釈迦像である。王とは「上宮法皇」である。従って、その顔も姿も上宮法皇がモデルである。

法興寺本尊は「丈六の仏像」で現在明日香の「安居(あんご)院」本尊の釈迦像である。この仏像は、修復につぐ修復で、原型をとどめていないと云われるが、この仏像も施主、「上宮法皇」をモデルとして作られていると思われる。二つの釈迦像は姿、形がほぼ同じである。

法興寺は「天皇」自らの誓願によって造営された寺院で、仏法を興す法興の代の象徴として造営された国立寺院であった。

では、日本書紀が記録した高麗國大興王の言葉、「日本國の天皇」とは誰か。隋王朝の認識と同じである。隋王朝が認識していた「倭王」、つまり、法隆寺金堂釈迦三尊光背銘「上宮法皇」である。

推古紀13年に登場する「天皇」とは日本國天皇・上宮法皇である。「皇太子」とは上宮法皇の皇太子「山代王」である。「大臣」とは蘇我馬子である。推古紀の「天皇」とは「推古女帝」ではなく上宮法皇である。推古紀とは推古の世の記録ではない。上宮法皇の世の記録である。

「法興寺」は法興の代の天皇「上宮法皇」によって造営された。その起工年は法興元年がふさわしい。この設定で日本書紀法興寺造営記録を上宮法皇の治世に移し替えてみよう。

崇峻紀・推古紀	上宮法皇紀
587年 起、法興寺	
588年 崇峻天皇即位 始作法興寺	
589年	
590年 崇峻3年冬10月 入山、取寺材	
591年	591年 法興元年 起、法興寺
592年 崇峻5年 起大法興寺仏堂、歩廊 崇峻天皇崩御・推古即位	592年 始作、法興寺
593年 仏舎利、置干法法興寺刹柱礎中・建刹柱。	593年
594年	594年 入山、取寺材
595年	595年
596年 推古4年冬11月 法興寺造竟	596年 起、大法興寺仏堂、歩廊
597年	597年 仏舎利、置干法法興寺刹柱礎中・建刹柱
598年	598年
599年	599年
600年	600年 法興寺造竟 第一回遣隋使
601年	601年
602年	602年
603年	603年

604年	604年
605年 銅・繡の丈六の仏像、各一軀を造る。	605年
606年 銅・繡の丈六の仏像、各一軀完成。 法興寺金堂に安置。	606年
	607年 第二回遣隋使
	608年
	609年 銅・繡の丈六の仏像、各一軀を造る。
	610年 銅・繡の丈六の仏像、各一軀完成。 法興寺金堂に安置。
	611年
621年 2月5日、厩戸豊聡耳皇子命、斑鳩宮に薨りましぬ。是の月に上宮太子を磯長陵に葬る。	621年 上宮法皇の太后崩
	622年 法興32年上宮法皇崩御
	623年 法隆寺釈迦三尊佛敬造・新羅・任那、大使を派遣して仏像・金塔・舍利を献上。
628年 推古天皇崩御	

法興は上宮法皇の治世の元号である。そして法興寺は法興の代に造られた故、法興寺である。この真実に立って推古紀を読めば、推古紀に26回登場する「天皇」は推古ではなく、上宮法皇である。日本書紀編者はこの天皇を「厩戸豊聡耳皇子命」と描き、推古天皇の摂政と改竄した。

法興寺と法隆寺

法興寺は昭和31年5月発掘調査が始まるまでいかなる寺だったか誰にも分からなかった。またその本尊金銅釈迦物仏は一時野ざらしにされ、敬造当時のお姿とは全く変わり果てたお姿となっている。なぜ栄光の法興寺、当時東アジア最高の大寺院がこのような運命を辿ったのか。脇道に逸れるが少し述べてみたい。日本書紀には法興寺建立の記事は残っているが、廃寺となった記録はない。日本書紀だけではなく、いかなる史料にもその後の記録はない。遺構は完全に残っているにも関わらずこの大寺院の記録がないというのは誠に不思議なことである。謎といえる。

地下60cmに南北に並んだ基壇石・金堂は正面21.2m、奥行17.5m・塔と思われる一辺7mの正方形の建物跡・西金堂は東西14.8m、南北19.3mの建物・東金堂・中門は正面16.7m、奥行13.3m・回廊は柱間一間の単廊、塔の中心線から110mの位置にある・南門は正面10.5m、奥行き8.4m・塔基壇の地中に金銅製の舍利容器・講堂

基壇石は崩された様子はない。また塔基壇の地中には金銅製の舍利容器すら残っていた。法隆寺のように燃え落ちたのではない。また戦争によって破壊されたのでもない。基壇石だけを残し、建物だけが忽然と姿を消してしまった。法興寺はどうなったのか。解体移築されたのである。北金堂、塔、中門、回廊は解体移築された。どこへか。斑鳩である。斑鳩の法隆寺は法興寺が移築された寺である。元の法隆寺は焼失している。その後再建された。だが再建は新しく建造されたのではない。移築された寺だった。ではどの寺が移築されたのか。今なお論争の焦点である。九州太宰府の寺が移築されたという人もいる。だがその寺跡と法隆寺は一致しない。移築された寺は九州の寺ではなく、奈良の法興寺である。現在の法隆寺は法興寺の北金堂、五重塔、中門、回廊である。

奈良文化財研究所は法隆寺五重塔の中心柱の伐採年は594年であると発表した。法隆寺五重塔は法興寺五重塔である。その中心柱の伐採は594年という判定は日本書紀の法興寺記事「崇峻3年(590年)冬10月入山、取寺材」と4年のずれがある。しかし、このずれは日本書紀編者の誤りである。私たちの「上宮法皇紀」に従い、「法興元年(591年)」を「法興寺起」と設定すれば「冬10月入山、取寺材」は4年後の594年となる。

奈良文化財研究所の研究結果は法隆寺を巡る大きな謎を解く鍵となったばかりでなく、日本書紀の編年の誤りを明らかにすることにつながった。

(1)法隆寺五重塔は法興寺の五重塔である。

(2)法興寺の起工式は日本書紀の崇峻3年ではなく、法興元年591年である。

なぜ、法興寺は移築されたのか。持統天皇である。持統天皇は九州から奈良に戻って即位した。持統の宗教政策は九州天皇家の祖先神崇拝であった。そして三重県伊勢に伊勢神宮を創建した。持統に始まる天皇家(近畿天皇家と呼ぼう)の国家宗教は天照大神である。上宮法皇が創建し、日本國の信仰を集めた法興寺は邪魔であった。こうして法興寺は解体される運命にあったが、恐らく日本國の上宮法皇縁の人々は、焼失した法隆寺の再建として法興寺を移築することを持統朝に願い出たのであろう。本尊金銅釈迦佛は明日香に置き去りにされたが、上宮法皇の尺寸の釈迦三尊佛(上宮法皇・太后・王后)は斑鳩に運ばれ、北金堂の本尊として安置された。こうして法興寺の釈迦三尊佛は法隆寺の釈迦三尊佛となったのである。

法興寺落成法要への新羅大使・任那大使を迎えた上宮法皇

推古18年(610年)冬10月の8日に、新羅・任那の使人、京に臻(まう)いた。是の日に、額田部連比羅夫に命(みこと)おほせて、新羅の客、迎ふる莊馬(かざりうま)の長とす。膳臣大伴を以て、任那の客迎ふる莊馬の長とす。即ち阿斗の河邊の館に安置(は)べり。9日に、客等、朝庭拝む。是に、秦造河勝・土部連菟に命せて、新羅の導者とす。間人連鹽蓋・阿閉臣大籠を以て、任那の導者とす。共に引きて南の門より入りて、庭中に立てり。時に大伴咋連・蘇我豊浦蝦夷臣・坂本糠手臣・阿部鳥子臣、共に位より起ちて、進みて庭に伏せり。是に、両つの國の客等、各再拝みて、使の旨を奏す。

610年新羅・任那の国使は10月8日に大阪難波から「京」に向かった。この日は「阿斗の河邊の館」に滞在した。「阿斗の河邊の館」とは河内國洪川郡跡部郷で、現在の八尾市跡部本町である。

彼らが通った道は難波と京を結ぶ竹内街道(国道25線)である。その途中に八尾市跡部本町がある。跡部本町の南には細いながらも川が流れている。「河邊の館」と矛盾しない。また、跡部本町の東南には太子堂という地名があり、その近くの大聖勝軍寺がある。この寺は上宮法王が仏教導入をかけて物部氏と戦った戦場であった。

新羅・任那の客は上宮法皇ゆかりの大聖勝軍寺の側を通り、国道25線を通り、165号線を南下した。そこには、上宮法王が死後、眠ることとなる太子町・磯長陵がある。そして、166号線の終点は藤原京である。新羅・任那の國使を迎えた「京」とはこの藤原京である。

9日に、客等、朝庭拝む。是に、秦造河勝・土部連菟に命せて、新羅の導者とす。間人連鹽蓋・阿閉臣大籠を以て、任那の導者とす。共に引きて南の門より入りて、庭中に立てり。

新羅導者に指名された秦造河勝は上宮法皇の腹心である。新羅・任那の大使を歓待した天皇は上宮法皇である。610年の新羅・任那大使の訪日目的は何だったのか。

18年(610)春三月に高麗の王が僧雲徴・法定を貢上る。雲徴は五經を知れり。

僧雲徴はなぜ来日したのか。私たちが設定した「上宮法皇紀」に従うと610年は法興寺の本尊丈六の釈迦仏が完成し、金銅に安置された年である。法興寺はこの年完成したのである。当然、国を挙げての落成法要が営まれたであろう。高麗王が僧を贈り、新羅大使・任那大使が来日したのもそのためであろう。彼らは法興寺落成法要の祝賀大使であったと思われる。



遣唐使と上宮法皇

推古十五年(607)秋七月の戊申朔庚戌(3日)に、大禮小野臣妹子を大唐に遣す。鞍作福利を以て通事とす。

推古十六年(608)の夏四月に、小野臣妹子、大唐より至る。唐國、妹子臣を號けて蘇因高と曰ふ。即ち大唐の使人裴世清・下客十二人、妹子臣に従ひて、筑紫に至る。難波吉士雄成を遣して、大唐の客裴世清等を召す。唐の客の為に更新しき館を難波の高麗館の上に造る。六月壬寅朔丙辰(15日)に、客等難波津に泊れり。是の日に、飾船卅艘を以て、客等を江口に迎へて、新しき館に安置らしむ。

推古十五年(607)は第二回遣隋使である。翌年608年の使者は隋の使者、文林郎裴清である。607年は遣隋使だが推古紀の内容は遣唐使に関する史実を書いている。年代を変更すべきである。唐建国は618年である。従って遣隋使の記事はそれ以降である。日本書紀編者は遣唐使の年代を検討する際、12年早めたまちがいをしたと思われる。実際は607年の一回り後の619年であろう。唐建国の翌年の619年は上宮法皇の治世である。

遣唐使は小野妹子、唐の客人は「唐の裴世清」である。小野妹子は唐から「蘇因高」と呼ばれたと書かれている。妹子は「蘇(我)」一族だったのであろう。小野妹子と日本國上宮法皇は深い主従関係にあった。上宮法皇が産まれた時、三人の姫が養育係に選ばれた。その一人が小野妹子の娘であった。この三人の姫は上宮法皇が亡くなった時、尼になり、上宮法皇が埋葬された磯長陵の前に小さな祠を建てて菩提を弔った。三人の尼の墓は太子町の西方院にある。小野妹子の墓は大阪府太子町にあり、上宮法皇の磯長陵からそれほど離れてはいない。小野妹子は上宮聖王の腹心で、よって、遣唐使として唐に遣わされたのである。筑紫とは博多である。難波とは大阪難波、難波宮が存在した大阪府中央区である。江口とは東淀川区江口である。遣唐使小野妹子を送った國は日本國上宮法皇である。小野妹子は隋へ詣で、また唐にも詣でている。600年・607年の遣隋使、619年の遣唐使の日本國の天皇は上宮法皇である。

是に、中臣宮地連烏磨呂・大河内直糠手・船史王平を以て掌客とす。爰に妹子臣、奏して曰はく、「臣、参還る時、唐の帝、書を以て臣に授く。然るに百濟國を経過る日に、百濟人、探りて掠み取る。是を以て上ることを得ず。是に、群臣、議りて曰はく、「夫れ使たる人は死ると雖む、旨を失はず。是の使、何にぞ怠りて、大國の書を失ふや」といふ。則ち流刑に坐す。時に天皇、勅して曰はく、「妹子、書を失ふ罪有り」と雖も、輒く罪すべからず。其の大國の客等聞かむこと、亦不良し」とのたまふ。乃ち赦して坐したまはず。

秋八月辛丑朔癸卯(3日)に、唐の客京に入る。是の日に、飾騎七十五匹を遣して、唐の客を海石榴市の術に迎ふ。額田部連比羅夫、以て禮の辭を告す。壬子(12日)に、唐の客を朝庭に召して、使の旨を奏さしむ。時に阿倍鳥臣・物部依網連抱、二人を客の導者とす。是に、大唐の國の信物を庭中に置く。時に使主裴世清、親ら書を持ちて、兩度再拜みて、使の旨を言上して立つ。其の書に曰はく、「皇帝、倭皇を問ふ。使人長吏大禮蘇因高等、至でて懷を具にす。朕、寶命を欽び承けて區宇に臨み仰ぐ。徳化を弘めて、含靈に覃び被らしむることを思ふ。愛み育ふ情、遐く邇きに隔無し。知皇、海表に介り居して、庶を撫で寧みし、境の内安樂にして、風俗融り和ひ、深き氣至れる誠ありて、遠く朝貢ふことを脩つといふことを知りぬ。丹款なる美を、朕、嘉すること有り。稍に喧なり。比は常の如し。故、鴻臚寺の掌客裴世清等を遣して、稍に往く意を宣ふ。并て送物すこと、別の如し。」といふ。時に阿倍臣、出で進みて、其の書を受けて進み行く。大伴嚙連、迎へ出でて書を承けて、大門の前の机の上に置きて奏す。事畢りて退づ。是の時に、皇子・諸王・諸臣、悉に金の髻花を以て頭に着せり。亦衣服も皆用錦・紫・繡・織、及び五色の綾羅を用いる。一云、服色皆用冠色。丙辰(16日)に、唐の客等を朝に饗たまふ。

唐の国書には「朕、宝命を承けるを欽び」と皇帝としての言葉がある。皇帝とは初代皇帝高祖李淵である。唐建国は618年である。唐建国に対して極東アジアの諸國はすぐさま反応して、祝賀の国使を派遣している。高句麗は高祖即位の翌年の619年(武徳2年)に国使を派遣した。621年(武徳4年)に新羅・百濟が使者を派遣した。これら朝鮮半島の三国は、唐建国直後、直ちに祝賀の大使を送ったのである。その結果、624年(武徳7年)に高句麗王は上柱國・遼東郡主、新羅王は柱國・樂浪郡主、百濟王は帶方郡主に任命されている。

我が國の遣唐使小野妹子が唐に渡ったのは、高句麗の遣唐使と同じ619年であろう。推古紀編者が書いた推古十五年(607)は一回り(12年)ずれている。掌客として中臣宮地連烏磨呂・大河内直糠手・船史王平が任命されている。いずれも上宮法皇の重臣たちであろう。船史王平は名前に誤りがあると思われる。実名は船氏王後であろう。彼も日本國の重臣である。

「秋八月辛丑朔癸卯(3日)に、唐の客京に入る。」と記している。京とは条坊都市をいう。平城京以前で「京」と呼ばれた都は九州では

太宰府である。関西では藤原京である。裴世清が入京したのは太宰府ではない。奈良明日香に存在した京とは藤原京である。この時すでに藤原京が存在した。



九月の辛未朔乙亥(5日)に、客等を難波の大郡に饗たまふ。辛巳(11日)に、唐の客裴世清、罷り歸りぬ。則ち復小野妹子臣をもって大使とす。吉士雄成をもて小使とす。福利を通事とす。唐の客に副へて遣す。爰に天皇唐の帝を聘ふ。其の辭に曰はく、「東の天皇、敬みて西の皇帝に曰す。使人鴻臚寺の掌客裴世清等至りて、久しき憶方に解けぬ。季秋、薄に冷し。尊、何如に。想ふに清愈にか。此は即ち常の如し。今遣大禮蘇因高・大禮乎那利等を往でしむ。謹みて白す。具ならず」といふ。是の時に、唐の國に遣す學生倭漢直福因・奈羅譯語惠明・高向漢人玄理・新漢人大罔、學問僧新漢人日文・南淵漢人請安・志賀漢人慧隱・新漢人廣濟等、并八人なり。

日本國の天皇は自らを「東の天皇」を称している。この天皇とは上宮法皇である。「使人鴻臚寺の掌客裴世清等至りて、久しき憶方に解けぬ。」と応えている。日本國天皇上宮法皇が抱いていた「久しき憶」とは何か。恐らく、唐の対日政策であろう。唐の日本外交は侵略か和平か？この一点を日本國天皇は知りたかった。この懸念に対する回答を鴻臚寺の掌客「裴世清」は持ってきた。それを読んで日本國天皇上宮法皇は安堵したのである。高祖、李淵は和平を約束したのであろう。日本國天皇と唐皇帝との友好は白村江で日本國と唐が対戦した後も続いていたと思われる。新唐日本伝には「670年倭国遣唐使」の記録が残る。高宗李治が敗戦国日本へ領土を要求した、或いは支配の為に都督府を設置しようとしたという記録はない。

「小野妹子臣をもって大使とす。吉士雄成を小使とす。」と、9月11日、唐の国使が帰国する時、二人の送使が撰ばれた。小野妹子と吉士雄成である。雄成について岡本精一氏が解説している。

太子側近の一人、調子丸も百済からの渡来人である。百済の聖明王の弟、調宰相の子で、十三の時来日し、太子の側近として仕え、太子の愛馬黒駒の御者(舎人)となり、生涯、太子に尽くした。斑鳩宮の西北の角、今の東里に住居があったと『大和志料』に述べている。

また百済王の豊璋は、新羅との戦いに敗れ、日本に亡命してきて大和に住んだ。その子孫は大原姓を名のり、兄弟三人で推古六年(598)に片岡王寺(放光禪寺)を建てた。この寺名から王寺町という町名が付けられたという。百済の扶余出土の瓦とよく似た瓦が発掘され、百済と片岡王寺と関係があったことが分かる。

また『広隆寺縁起』によると、六二三年に秦河勝が京都葛野の太秦に広隆寺を建て、太子の冥福を祈り追善供養した。その時、新羅の真平王献上の弥勒菩薩を祭った。それは宝冠のある半跏思惟像で、今も国宝弥勒像として伝わっている、と広隆寺では述べている。

ここで少し秦河勝の祖先のことを述べてみよう。秦氏の祖先は応神天皇のころ渡来した新羅系渡来人で、淀川中流や近江愛知郡や大和・河内に住んでいた。秦一族の中では、京都葛野の秦氏が最も勢力があった。養蚕や機織りだけでなく灌漑や開墾も行った。京都の稲荷神社は秦氏が祭った神社である。秦河勝は太子の側近として仕え、大仁の冠位をもらい、610年には新羅の使者の接待役もしている。もうひとり、太子の側近として活躍した難波吉士雄成も、新羅系渡来人子孫といわれている。この雄成は、難波を中心に勢力をもっていた。そして難波に私寺として四天王寺を建てたといわれている。

「飛鳥寺と聖徳太子」岡本精一

吉士雄成も上宮法皇の側近であった。難波に勢力を持ち四天王寺を建立した。四天王寺は上宮法皇を祀る。遣唐使についての推古紀の記録は日本國天皇家と上宮法皇の記録である。ここには「推古天皇」はいない。推古紀天皇とは上宮法皇である。

上宮法皇没(622年)後の日本國天皇家

法興の世は591年から622年である。日本書紀は「推古29年(621年)春2月5日に厩戸豊聡耳皇子命、斑鳩宮に薨りましぬ。是の月に上宮太子を磯長陵に葬る。」という死亡記事を書いている。上宮太子とは上宮法皇である。だが此の死亡年月日はまちがっている。死亡年月日は釈迦三尊光背銘に書かれた622年2月22日である。実際、関西の聖徳太子ゆかりの寺、四天王寺、叡福寺、西方寺などでは法要は旧暦の2月22日(新暦4月10日)に行われる。

622年(推古30年)に上宮法皇は亡くなった。ここで法興の世は終わる。当然新しい天皇が即位した。従って推古31年(623年)以降の記事は新しい天皇の代であると解するべきである。

新しい天皇とは誰か。上宮法皇の子、山代王(山背大兄王)である。推古紀では皇太子として登場する。推古紀の推古31年(623年)以降に登場する天皇とは山代王である。だが、山代王の運命は過酷な最後を迎える。その最後は皇極紀2年(643年)にある。

皇極2年(643年)冬10月 12日に、蘇我臣入鹿、獨り謀りて、上宮の王等を廢てて、古人大兄を立てて天皇とすむとす。蘇我臣入鹿、深く上宮の王等の威名ありて、天下に賑すことを忌みて、獨り僭ひ立たむことを謨る。是の月に、茨田の水、還りて清みぬ。

11月の丙子の朔に、蘇我臣入鹿、小徳巨勢徳大臣・大仁土師娑婆連を遣りて、山背大兄王達を斑鳩に掩はしむ。

- (1)蘇我入鹿は父蝦夷と相談せず上宮王を廃て古人大兄を天皇位に据えようとした。「棄てて」とはこの時上宮王(山背大兄王)が天皇だったからである。
- (2)上宮法皇の皇太子・山背大兄王は223年に即位、643年(皇極2年)蘇我入鹿によって滅ぼされるまで天皇位にあった。
- (3)推古紀31年(623年)から舒明紀、皇極紀2年(643年)の間の出来事は山代王の代の出来事である。
- (4)日本國天皇家では「舒明」・「皇極」という天皇は存在しない。
- (5)日本國天皇家の代は上宮法皇(591年～622年)―山代王(623年～643年)―天智天皇(645年～672年)と続く。

591 上宮法皇即位・元号「法興」

599 冠位十二階

600 十七条憲法制定・

第一回遣隋使(隋・文帝)

601 法興寺丈六金銅釈迦像敬造・高麗國大興王黄金300両を献上

607 第二回遣隋使(隋・煬帝)

608 隋答礼使「裴清」来日

610 新羅・任那から大使

613 難波(大阪)より京(藤原京)に至るまでに大道(竹内街道)を置く

616 皇太子(山代王)、嶋大臣(蘇我馬子)、天皇記及び國記、臣連伴造國造百八十部合わせて公民等の本記を録す。

618 唐建国(大業8年・李淵・元号武徳)・

619 第一回遣唐使(小野妹子)

620 小野妹子帰国・唐大使「裴清世」来日

622 上宮法皇没・大阪府太子町叡福寺に埋葬

623 山代王天皇即位(阿須迦宮)

631 第二回遣唐使(唐太宗・李世民)

「旧唐書」に記載されている631年・遣唐使は唐皇帝が高祖・李淵(618～626)から太宗・李世民(626～649)に代わったその即位祝賀の国使である。この遣唐使は第二回である。遣唐使とは本来中国皇帝即位の祝賀使節である。唐の使者は新州の刺史・高表仁である。この使者は喧嘩をして帰ってしまう。

631『旧唐書』倭国日本伝

貞観5年(631)、使いを遣わして方物を献ず。太宗、その道の遠きを矜み、所司に勅して、歳貢せしむることなからしむ。また、新州の刺史高表仁を遣わし、節を持し、往きてこれを撫せしむ。表仁、綏遠の才なく、王子と礼を争い、朝命を宣べずして還る。二十二年に至りまた、新羅に付して表を奉り、もって起居を通ず。

鴻臚寺の掌客裴世清への接待と異なる。長吏大礼蘇因高が第一回遣唐使で、旧唐書の631年遣唐使は二回目である。この時の中国皇帝は太宗李世民である。太宗李世民は旧唐書・倭国日本伝が、「その道の遠きを矜み、所司に勅して、歳貢せしむることなからしむ。」と、伝えている如く、友好的であった。しかし、太宗李世民は2回の高句麗遠征を行い侵略を開始する。

643 山代天皇、蘇我馬子によって殺害さる

645 蘇我氏滅亡・天智天皇即位(大阪難波の宮)・元号「大化」・「大化の改新」の詔勅

648 大野及び椋・築城

650 天智天皇元号「白雉」

653 第三回遣唐使吉士長丹・高田根麻呂(唐高宗李治)

650年、唐は高宗李治が即位する。この祝賀に遣唐使が派遣された。

653(白雉4年) 遣唐使吉士長丹・高田根麻呂

654(白雉5年) 遣唐使高向玄理河邊麻呂

654 倭国琥珀と瑪瑙を貢献(旧唐書本紀)、新羅武列王即位

659 第四回遣唐使(高宗李治)

遣唐使・坂合部石布・津守吉祥(「斉明5年」)

この遣唐使は和平工作であろう。しかし直後日本國滅亡の遠因となった白村江で唐と対戦する。

660 唐「蘇定方」が水陸十三萬で百濟侵略・百濟平定。「唐」は「熊津」をはじめ五都督府を置く。

662 白村江の戦闘(唐高宗李治)(旧唐書)

665 「劉仁軌」が「新羅及び百濟、耽羅、倭の四国首長を連行」(旧唐書)

668 「高句麗」平壤陥落。安東都護府と九都督府を置く。

巻27 天智天皇

野中寺金銅弥勒菩薩の日本國天皇

日本書紀は日本國天皇家が作成した史書ではない。持統に始まる近畿天皇家が作成した史書である。近畿天皇家の史官の手に依ったものではあるが、その史官は天武の九州天皇家出身の史官だった。当然、九州天皇家の歴史には強いが、日本國天皇家の歴史には弱い。

「法隆寺釈迦三尊」の光背に記された「上宮法皇」の記録と「推古紀」とは大きく食い違う。日本書紀編者は日本國天皇家と九州天皇家をそれぞれ独立した王朝として歴史を編纂するという方法をとらなかった。九州天皇家は神武から天武までである。この間の歴史は、九州天皇家に、「一書」や古事記(口伝)として多く残っていた。だが、日本國天皇家の歴史はほとんど手に入らなかった。記録が残っていなかったからである。

高句麗の僧、沙門道顗の書き記した書物は「日本世記」という名前である。この本は日本國天皇家に関する歴史書である。日本書紀編者は海外の文献に依らなければ日本國天皇家の歴史は正確には分からなかった。日本國天皇家の歴代は諸外国から「天皇」呼ばれていた。今、私たちが奈良、大阪で見る陵は神武に始まり、天武までの九州天皇家の天皇陵ではなく、日本國天皇家一族の陵である。

十七条憲法は日本國天皇家の憲法である。仏教は日本國天皇の國教である。藤原京が日本國天皇家の首都であった。その藤原京址から出土した木簡に国名と行政区名が記されていた。

己亥(699)年10月 上挾國阿波評松里

国名は「上挾國」で行政区が「阿波評」である。この国名及び行政区名は持統近畿天皇家の令制国にはない。持統近畿天皇家の行政区は「郡」である。また「阿波」は持統近畿天皇家では「阿波の國」で「阿波の評」ではない。「上挾國阿波評」は持統近畿天皇家の行政組織ではない。「評」とは日本國天皇家の行政組織である。国家が異なれば行政組織も異なる。日本國天皇家は「評」、九州天皇家は「郡」、近畿天皇家は当然「郡」を引き継いだ。

加夜(賀陽)國

日本國天皇家の地方国家も記録に残っている。岡山県総社市に存在した「加夜國」である。2008年6月、岡山県総社市南溝手の大文字遺跡から文字瓦2点が出土した。この瓦は隣接する「栢寺」廢寺に使用されていたもので、「評」などの文字が刻まれていた。

栢寺は岡山総社に存在した「加夜國」の国造、賀陽氏が建てた氏寺で、四天王寺様式の伽藍配置で建立されていた。その栢寺の瓦に「評」という地方行政区を示す文字が刻まれていたのである。つまり、「加夜國」は「評」という行政区を敷いていた国家であった。総社市に存在した「加夜國」と徳島県に存在した「上挾國」の行政区は同じ「評」である。持統近畿天皇家の行政組織は「郡」である。「評」が古く、「郡」が新しい。「評」を使った国家と「郡」を使った国家は別の国家である。



「加夜國(岡山総社)」は日本國の地方国家だった。「加夜國」が日本國天皇が病氣になった時、回復を誓願して造った弥勒菩薩が、「中の太子」と呼ばれている羽曳野市野中寺(やちゅうじ)に伝わる。金銅弥勒菩薩の台座の框(かまち)には造像記の銘文がある。

丙寅年四月大旧八日癸卯開記

栢寺智識之等詣中宮天皇大御身勞坐之時請願之奉弥勒御像也

友等人数一百十八是依六道四生人等此教可相之也

丙寅年四月大旧八日癸卯開(みずのとうひらく)に記す

栢(かや)寺の智識之等、中宮天皇の大御身(おおみみ)勞(いたず)き坐(ま)しし時に詣り、請願し奉る弥勒の御像也

友等人数一百十八是に依りて六道の四生の人等を此の教に相(みちび)く可き也 (野中寺ガイドブック)

丙寅年とは666年である。その四月に「中宮天皇」が大御身勞坐(病氣)になった。そこで、栢寺の智識(施主)が平癒を請願のため、この金銅の弥勒菩薩像を奉納した。この弥勒菩薩は現在羽曳野市野中寺にある。この寺は「上の太子」「中の太子」「下の太子」と呼ばれる寺の一つで、日本國天皇家の寺である。

「加夜國」は日本國天皇家にこの黄金の弥勒菩薩を奉納したのである。その時、日本國には「中宮天皇」と呼ばれていた天皇が実在した。666年と云えば、唐・新羅連合軍の前に日本國天皇家軍が壊滅して4年後で



野中寺金銅弥勒菩薩

ある。日本國天皇「中宮天皇」は心身ともに疲れ果てていたと思われる。故に、友好国であった「加夜國」は弥勒菩薩を日本國天皇家の「中の太子(中宮)」に奉納したのであろう。666年は、日本書紀では、「天智天皇」の時代である。「天智」と諡された天皇とはこの「中宮天皇」である。当時は「中宮天皇」と呼ばれていたのである。

日本國天皇家、「白村江」敗戦

日本國天皇は上宮法皇以来唐との平和外交に最善を尽くしてきた。各皇帝の即位には祝賀の大使を派遣し、両国の友好が危くなったときも大使を派遣した。しかし、唐の膨張はとどまらず、日本國の友好国であった百済を攻め滅ぼした。日本國天皇家は百済國の再興をかけ、白村江で唐・新羅連合軍と相戦うこととなる。推古紀では天智二年(663)三月のことである。日本國天皇家は援軍を送り、ついに、唐との戦争に入る。百済救援軍は2萬7千という大軍であった。その援軍は次の陣立てとなっていた。

天智二年三月前將軍上毛野君稚子(わかこ)・間人連大蓋(おほふた)、中將軍巨勢神前臣譯語(をさ)・三輪君根麻呂(ねまろ)、後將軍阿倍引田臣比羅夫(ひらぶ)・大宅臣鎌柄(かまつか)を遣して、二萬七千人を率て、新羅を打たしむ。

前將軍が上毛野君稚子である。舒明紀に上毛野君形名という名の將軍が蝦夷討伐の將軍として登場する。形名と稚子は同族であろう。舒明紀の上毛野形名は蝦夷討伐に失敗する。この蝦夷討伐物語は日本國天皇家の物語である。蝦夷とは東海地方を指す。その蝦夷國との戦いに敗れ、形名は砦に逃げ帰える。蝦夷の軍に囲まれ夜の闇にまぎれて脱走しようとした時、妻が嘆いて叱咤する。

「慄(うれた)きかな、蝦夷の為に殺されむとすること。」といふ。則ち夫に謂(かた)りて曰はく、「汝が祖等(おやたち)、蒼海(あおうなはら)を渡り、萬里(とほきみち)を跨(あふどこ)びて、水表(をちかた)の政(まつりごと)を平(ことむ)けて、威武(かしこたけ)を以て後葉(のちのよ)に伝えたり。今汝頓(ひたぶる)に先祖が名を屈(くじ)かば、必ず後世の為に嗤(わら)はれなむ」といふ。乃ち酒を酌みて、強いて夫に飲ませしむ。而して親(みづか)ら夫の劍を佩(は)き、十の弓を張りて、女人数十に令して弦を鳴さしむ。既にして夫更に起ちて、仗(つはもの)を取りて進む。

恐るべき妻のおかげで形名は蝦夷に勝利する。この時、妻は夫に酒をすすめ鼓舞する際に言った言葉が次の言葉である。

汝が祖等、蒼海を渡り、萬里を跨(あふどこ)びて、水表(をちかた)の政(まつりごと)を平(ことむ)けて、威武(かしこたけ)を以て後葉(のちのよ)に伝えたり。

貴方の祖先ははるばる萬里の海を渡って来た。そして海外の國を平定し、その武勇を後世に伝えてきた。

これはまさしく倭王武の上表文である。上毛野君は姫氏の王の系譜であろう。姫氏は「磐井」が西九州の王であった時、日本國との決戦し、敗れた。その後、日本國に投化した。その一族に上毛野がいたのであろう。元来武勇を誇る一族である。百済救援二万七千軍の最前線の將軍に任命された武將が九州出身の上毛野君稚子(わかこ)であった。彼は善戦して新羅の二つの城を取った。しかし、八月白村江の戦いが勝負を決める。

天智二年(663)秋八月の十三日。新羅、百済王の己が良將を斬れるを以て、直に國に入りて先ず州柔(つぬ)を取らむことを謀れり。是に、百済、賊の計る所を知りて、諸將に謂りて曰はく、「今聞く、大日本の救將廬原君(いははらのきみ)臣、健兒萬余を率て、正に海を越えて至らむ。願はくば、諸の將軍等は、預め圖(はか)るべし。我自ら往きて、白村に待ち饗へむ」といふ。十七日に、賊將、州柔に至りて、其の王城を繞(かく)む。大唐の將軍、戦船一百七十艘を率て、白村江に陣烈(つらな)れり。二十七日に、日本の船師の初づ至る者と、大唐の船師と合い戦ふ。日本不利けて退く。大唐陣を堅めて守る。二十八日に、日本の諸將と百済の王と、氣象を觀ずして、相謂りて曰く、「我等先を争はば、彼自づから退くべし」といふ。更に日本の伍(つら)乱れた

る中軍の卒を率て、進みて大唐の陣を堅くせる軍を打つ。大唐、便ち左右より船を挟みて繞み戦う。須臾之際(ときのまに)に、官軍敗績(やぶ)れぬ。

百済王は八月、「大日本の救将廬原君(いはらのきみ)臣、健兒萬余を率て、正に海を越えて至らむ。」と諸将に伝える。そして自ら白村に迎えて労をねぎらうと言う。救援軍は「大日本」というように日本國天皇家からの援軍であった。司令官は「大日本の救将、廬原君(いはらのきみ)臣」である。日本國將軍・廬原君とは誰か不明であるが、万葉集に「廬原」という地名が歌われている。

田口益人大夫、上野國の司に任さす時に、駿河の淨見崎に至りて作る歌二首

万葉296番歌

廬原の 清見の崎の 三保の浦の 寛けき見つつ もの思ひもなし

万葉297番歌

晝見れど 飽かぬ田兒の浦 大君の 命恐み 夜見つるかも

「廬原」とは静岡県庵原郡であろう。白村江の戦いに救援に駆けつけた軍は静岡県の軍で、日本國の最も東の國から長駆百済に向かったと思われる。ここが日本國統治の東の境界だったであろう。

8月27日、白村江に到着した日本軍はすでに堅陣を構えていた唐の郎将・劉仁軌、新羅の金文武王の軍へ正面攻撃を挑む。だが、白村江に不案内な日本國軍は気象が読めず、満潮から干潮へ変わる潮時に突入し、舳先を回旋することが出来ず、左右から火攻めにあって束の間に敗れる。

日本國の軍は白村江で唐軍・新羅軍と戦い、壊滅に近い敗北を喫した。中国側の唐の劉仁軌將軍の記録書には「倭の酋長」を唐の都に送ったと記録している。この「倭」とは日本國である。

白村江で敗れた日本國天皇家は国土防衛のため城を築いている。

- 664 是歳、対馬・壱岐・筑紫國に坊(さきもり)と烽(すすみ)を置く。
又筑紫に大堤を築きて、水を貯えしむ。名づけて水城といふ。
- 665 8月に達率答城春初遣して、城を長門國に築かしむ。
- 667 達率憶禮福留・達率四比福夫を筑紫國に遣して、大野及び椽、二城を築かしむ。
- 671 倭國の高安城・讃岐國の山田郡の屋島城・対馬國の金田城を築く。
2月、高安城を修りて、穀と塩とを積む。又、長門城一つ・筑紫城二つ築く。

(1) 白村敗戦後「大野城」「椽城」「高安城」「屋島城」「金田城」「長門城」「筑紫城」を築いている。白村で大敗したとはいえ、日本國天皇家が減びたわけではない。日本國天皇が敗死したわけではない。日本國天皇家は唐の侵攻に備え、唐の侵入路の要地防衛を固めていた。

(2) 年輪年代測定法による「大野城門の柱」の測定結果がある。奈良国立文化財研究所の測定結果は「大野城の最外年輪は648年」である。この結果から「大野城」の築城は663白村江敗戦より15年前である。この結果は大宰府を護った大野城は665年が最初の築城ではなく648年には既に築かれていたということを明らかにしている。白村の戦いに敗れた日本國は再び大宰府防衛のため大野城を改築修理したのである。

対馬－壱岐－筑紫(博多)－長門(山口)－屋島(香川)－高安(大阪)は唐船団が百済から日本國に向かう侵攻ルートであった。

日本國天皇の対唐外交は太宰府

白村江敗戦後の日本國天皇家と唐との外交交渉は奈良で行われたのではない。太宰府である。次の日本書紀の一連の記事は太宰府でのことである。

659年 第四回遣唐使(高宗李治)

662年 白村江の会戦

664年

- 5月17日 百済の鎮將劉仁願、朝散大夫郭務悰等を遣して、表函と獻物とを進る。
- 10月1日 郭務悰等を發て遣す勅を宣たまふ。是の日に、中臣内臣、沙門智祥を遣して、物を郭務悰に賜ふ。
- 10月4日 郭務悰等に饗賜ふ。
- 12月12日 郭務悰等罷り歸りぬ。

665年

- 9月23日 唐国、朝散大夫沂州司馬上柱國劉徳高等を遣す。等といふは、右戎衛郎將上柱國百済禰軍・朝散大夫柱國郭務悰を謂ふ。凡て254人、7月28日に対馬に至る。
- 9月20日 筑紫に至る。
- 9月22日 表函を進る。
- 10月11日 大いに菟道に閱す。
- 11月13日 劉徳高等に饗賜ふ。
- 12月14日 物を劉徳高等に賜ふ。
- 12月 劉徳高等罷り歸りぬ。是歳、小錦守君大石等を大唐に遣す。

- (1)朝散大夫沂州司馬上柱國劉徳高が筑紫(博多)に到着したのは665年9月20日である。そして2日後の22日に表函(親書)を献上している。表函は天皇に渡されたものである。
- (2)この時、日本國天皇は筑紫(博多)の近くにいた。奈良藤原京ではない。
- (3)日本國天皇がいた御所とは太宰府である。
- (4)664年朝散大夫郭務悰が持ってきた表函は実は唐皇帝の親書ではなかった。故に唐の使者を京に入れなかったと伝わる。その京とは太宰府である。
- (5)日本國天皇は唐との外交のため太宰府に来ていた。唐との外交の舞台は太宰府であった。

667年

- 3月19日 都を近江に遷す。
- 11月9日 百済の鎮將劉仁願、熊津都督府熊山縣令上柱國司馬法聰等を遣して、大山下境部連石積等を筑紫都督府に送る。
- 11月13日 司馬法聰等罷り歸る。小山下伊吉連博徳・大乙下笠臣諸石を以て送使とす。

668年

- 7月 栗前王を以て、筑紫率(つくしのかみ)に拝(め)す。

669年

- 正月9日 蘇我赤兄臣を以て、筑紫率に拝す。
- 12月 是歳、小錦中河内直鯨等を遣して、大唐に使せしむ。又大唐、郭務悰等2千余人を遣せり。

671年

- 正月13日 百済の鎮將劉仁願、李守眞等を遣して、表上る。
- 6月 栗隈王を以て、筑紫率とす。
- 7月11日 唐人李守眞等、百済の使人等、並びに罷り歸りぬ。
- 11月10日 対馬國司、使を筑紫太宰府に遣して言さく、「月生ちて二日に、沙門道久・筑紫君薩野・韓嶋勝婆娑・布師首磐、四人、唐より来りて曰さく、『唐国の使人郭務悰等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、総合二千人、船四十七隻に乗りて、俱に比知嶋に泊まりて、相謂りて曰はく、今吾輩が八船、数衆し。忽然に彼に到れば、恐るらくは彼の防人、驚き駭(とよ)みて射戦はむといふ。乃ち道久等を遣して、預め稍(やうやく)に来朝る意を披き陳さしむ』とまうす」とまうす。
- 12月3日 天皇、近江宮に崩りましぬ。

- (1) 667年11月大山下境部連石積等が送られてきたのは筑紫都督府である。彼らは665年の唐への使者であった。その使者が筑紫都督府に戻ってきた。筑紫都督府とは太宰府のことである。
- (2) 彼らは、何故、奈良ではなく太宰府に送られてきたのか。その理由は、そこに日本國天皇が居たからであ

る。この時、天皇は唐との外交のため琵琶湖近江ではなく、太宰府にいた。太宰府は日本國の西の京であった。

(3) 天智紀の歴史舞台は奈良藤原京、滋賀近江、博多、大宰府と広域である。博多には百済の鎮將劉仁願が派遣してきた何千人の兵が駐屯していた。大宰府にいた日本國天皇はこれらの唐軍と対峙して外交をすすめていたのである。

(4) 671年12月3日に日本國天皇が亡くなった。亡くなった場所は近江宮である。この近江宮は滋賀県近江である。白村江敗戦後、太宰府で唐との外交に辛苦した日本國天皇は琵琶湖の近江宮に帰り、そこで亡くなった。この死が壬申の乱へとつながる。

巻28・29 天武九州天皇家の代

ここに白村江で唐に敗れ、その後の敗戦処理に苦慮した天智の代が終わる。そしてその死をきっかけに日本國天皇家の運命が大きく変わる。その歴史は日本書紀巻二十八天武天皇壬申の乱である。

大海人皇子は九州天皇家の都、彦島で生まれたと思われる。名前は「大海人皇子」である。「海人(あま)」は「天(あま)」である。大海人皇子の宮は「嶋宮」と云う。「嶋宮」は彦島の異称である「橘の嶋」に由来する。大海人皇子は彦島で生まれ、彦島の「嶋宮」で九州天皇家の王として北九州を統治していた。

大海人皇子の時代に東アジアの世界は激震する。唐が近隣諸国に侵略し、次々と國を滅ぼしたからである。唐の侵略によって百済が減じる。百済と同盟関係にあった日本列島の主権国家、日本國天皇家は百済救援に向けて全国から兵を動員した。8月27日、白村江に到着した日本軍はすでに堅陣を構えていた唐の郎将・劉仁軌、新羅の金文武王の軍へ正面攻撃を挑む。だが、白村江に不案内な日本國軍は気象が読めず、満潮から干潮へ変わる潮時に突入し、舳先を回旋することが出来ず、左右から火攻めにあって東の間に敗れる。

日本國の軍は白村江で唐軍・新羅軍と戦い、壊滅に近い敗北を喫した。中国側の唐の劉仁軌將軍の記録書には「倭の酋長」を唐の都に送ったと記録している。この「倭」とは日本國である。

やがて、百済に置かれた唐の都督府の鎮將が使者を日本國に派遣してきた。彼らは筑紫に滞在していた。戦勝国唐が戦後処理として日本國天皇家に何を求めたか、記録には全く残っていない。

唐にとっても奈良大阪に拠点を置く日本國を武力侵略するのは容易なことではない。瀬戸内海沿岸の各国は全て日本國の友好国である。まず、この瀬戸内海を渡ることさえ困難であろう。唐側は日本國天皇家と外交交渉を重ねるが、結論を見ないまま、671年日本國天皇が亡くなった。

天武は日本國天皇家の太政大臣、大友王の太宰府滞在中をねらって、672年に蜂起した。唐に敗れたとはいえ、日本國天皇家は唐を除けば、極東アジアで最大最強の国家である。九州天皇家の王であった天武に日本國天皇家を倒せるほどの力はない。天武が壬申の乱に勝利できたのはなぜか。

- (1) 戦場が北九州(小倉南区を中心)であったこと。
- (2) 天智天皇がなくなり、次の天皇が決まっていなかったこと。
- (3) 白村江の戦いで日本國天皇家の軍隊が壊滅していたこと。
- (4) 日本國朝廷の対唐強硬路線(再戦)が支持されていなかったこと。
- (5) 唐軍が博多に駐留していた。この唐軍を味方につけたこと。

天武は太宰府において日本統治

太宰府は元々「姫氏」が啓いた京である。創建は「倭の五王」の時代である。太宰とは総理の意である。その主である皇帝は中国皇帝である。「姫氏」は「呉」の出身であった。彼らは伝統的に中国皇帝に対して臣従し、自らを太宰と位置づけた。太宰府は九州の京であったが、それは、また中国皇帝に臣従する太宰の府でもあった。その後、太宰府は日本國天皇家の京となった。

壬申の乱後、天武は太宰府で日本全国を統治した。天武の時代(673～686)、我が國の首都は太宰府

であった。それまでは日本の首都は奈良藤原京であった。

686年9月9日に天武が亡くなった。亡くなったときの大后(持統)の歌がある。

天皇崩りまし時の大后の御作歌一首

159 やすみし わご大君の タされば 見し給ふらし 明ければ 問ひ給ふらし 神岳の 山の黄葉を
今日もかも 問ひ給はまし 明日もかも 見し賜はまし その山を 振り放け見つつ タされば あや
に悲しみ 明ければ うらさび暮らし 荒栲の 衣の袖は 乾る時もなし

一書に曰はく、天皇崩りまし時の太上天皇の御製歌二首

160 燃ゆる火も 取りて裏みて 袋には 入ると言はずや 面知らなくも
161 北山に たなびく雲の 青雲の 星離り行き 月を離りて

皇后持統の哀しみが、「山の紅葉がまだか」と尋ねる天武の姿の思い出と共に詠われている。持統が詠った「神岳」とは太宰府の鬼門を護る宝満山である。太宰府開府以来、神がこの山頂に祀られてきた。天武は宝満山の紅葉はまだか、と尋ねながら死んでいったのである。



壬申の乱で天武の拠点となったのは「東國」である。この「東國」とは太宰府から見ての「東國」である。「東國」とは行橋市、苅田町である。行橋市には、「伊勢國」が存在した。天照大神を祀った伊勢神宮もこの「伊勢」に存在した。そこで、天武は「伊勢に逢へ」と軍令を下し、自ら、行橋市を目指したのである。乱に勝利した天武は太宰府に入った。日本書紀天武紀(下)は太宰府に於ける天武治世の記録である。太宰府の長官の話が度々登場するのは、天武が太宰府大極殿に居たからである。太宰府が天武王朝の京であった。

大海人皇子の時代、正当な国権は日本國天皇家にあった。その運命を変えたのは唐である。日本國天皇家は唐の侵略に助けを求めた友好国百済を救援するため、622年白村江に出陣した。結果は白村江が血で染まったという大敗であった。

唐の百済占領司令官であった鎮将劉仁願は日本國との戦後交渉のため唐軍を博多に駐在した。日本國

朝廷はその交渉のため天皇を初め、太政大臣以下朝廷の主要な閣僚が太宰府に出向いていた。唐がいかなる要求をしたか、その記録は一切残っていない。

672年、壬申の乱が起こる。壬申の乱とは日本國天皇家にたいする九州天皇家の乱である。日本國天皇天智亡きあと、日本國天皇家の太政大臣大友王に対し九州天皇家、大海人皇子が反乱した。戦場は、九州天皇家の「近江」、すなわち、小倉南区だった。その結果は、九州在留の唐軍と九州の豪族を味方につけた大海人皇子が勝利する。

大海人皇子は九州天皇家の「飛鳥」で即位し、九州天皇家の皇子として史上初めて日本の天皇となった。天武天皇は九州を離れず、太宰府において全国を統治した。天武の時代、太宰府が日本の首都であった。

686年、天武が大宰府大極殿で亡くなった。やがて、皇太子草壁も亡くなってしまう。そこで、皇后持統は、太宰府を去り、再び父の地、日本國(奈良)に戻った。そして、691年、奈良藤原京で即位し、ここに新たな王朝、近畿天皇家と呼ぶべき王朝が始まることとなる。

だが、持統天皇とは日本國天皇家から見れば、「乱」によって権力を奪った非正当の天皇である。天武は白村の大敗の後、唐による占領をいかに防ぐか、外交交渉に全力を挙げていた日本國天皇家「天智」が没し、次の天皇が即位しない空白を狙って挙兵し、国権を奪った。天武は篡奪政権であった。当時の日本國の人は皆その事実を知っていた。従って、持統朝は自らの正当性を作り上げなければならなかった。それが日本書紀である。この史書に「日本」という國名を付けたのは、自らが「日本國天皇家」の正当を受け継ぐものであることを表明したためである。日本書紀は持統朝の正当性を無理矢理主張するために複雑な構成となった。

巻30 持統天皇・近畿天皇家の始まり



持統の遷都(太宰府から藤原京へ)

持統天皇は皇太子、草壁皇子が亡くなって後、父の國、奈良藤原京へ移って即位した。藤原京は日本國天皇家の京である。持統が藤原京を作ったのではない。持統以前にこの京は存在した。持統が造ったのは京ではなく、自らの宮である。

持統の宮造営記録

- ・持統4年(690)10月29日、高市皇子、藤原の宮処を觀す。公卿百寮從なり
- ・持統6年(692)5月23日に、淨廣肆難波王等を遣わして、藤原の宮処を鎮め祭らしむ
- ・持統6年(692)6月30日、天皇、藤原の宮処を觀す
- ・持統7年(693)8月朔に、藤原の宮地に幸す。
- ・持統8年(694)12月6日に、藤原宮に遷り居します。

692年5月に藤原宮の地鎮祭を行って、694年12月に遷居している。宮の建造は27ヶ月要してる。持統の宮を作るのに、これだけの期日を要している。

藤原京跡の発掘調査から藤原京は丘を切り開く土木工事から始めて、資材運搬の運河も掘られていたことが分かっている。この藤原京造営がわずか27ヶ月で出来たわけではない。

持統が太宰府から奈良に遷都した時、藤原京はすでに存在した。藤原京が存在したからこそ、持統は太宰府を離れ奈良に遷都したのだとも言える。持統より以前に、随・唐・新羅・百濟・高句麗からの國使を迎え入れていた日本國天皇家の京が存在していた。藤原京である。

近畿天皇家の初代天皇、持統

持統天皇は持統四年(691年)、太宰府から日本國の京、藤原京に遷都して即位した。この時、九州天皇家の「嶋宮(彦嶋)」に貯蓄されていた稻を、藤原京と近畿の高齡者に配っている。

持統は奈良藤原京で即位した。ここに、持統を初代とする近畿天皇家が始まる。近畿天皇家の首都平城京ができるまで、藤原京は持統朝の首都だった。694年12月、持統は新しい宮が完成し移った。

藤原京址から「評」と「郡」の両方の木簡が出土する。「評」は日本國の行政区である。「郡」は近畿天皇家の行政区である。藤原京は日本國の首都であった。「評」の木簡が出土するのは当然である。日本國天皇家が滅び、新たな支配者となった九州天皇家天武の妻、持統が藤原京を支配した。九州天皇家の行政区名「郡」の木簡が出土するのも、また、当然である。

日本書紀は持統紀で終わる。持統で以て日本書紀が終わるのは、すでに述べたように、持統が日本國天皇家の正当な継承者であることを主張するためである。持統で以て新しい天皇家が始まる。持統は九州天皇家が代々使ってきた「倭(やまと)」という国号を捨て、「日本國」を名乗ったのは当然といえば当然である。持統は祖父の国号「日本國」を継承したのである。

近畿天皇家の京、平城京

- ・持統5年(691)10月甲子(27日)に、使者を遣して新益京を鎮め祭らしむ。
- ・持統6年(692)春正月戊寅(12日)に、天皇、新益京の路を觀す。
壬午(16日)に、公卿より以下、初位より以上に至るまでに饗たまふ。

「新益京」に関する二つの記事である。通説では「新益京」とは藤原京である。しかし、「新益」とは漢字が表している如く、「新しく益す(増す)」という意味である。現在、既に、京が存在する。だが、新しい京を造ろうという意味である。「新益京」とは藤原京ではない。藤原京に替わって新しく造る京である。

持統は690年に奈良に戻ってきた。日本國は持統の父の國であった。そこには藤原京があった。持統はこの京に変わる新しい近畿天皇家の京を作ろうと考えた。天武が居た太宰府は九州の王者、「姬氏(倭の五王)」が造った京である。持統が今居る藤原京は日本國天皇家が造った京である。持統は日本の天皇となった。故

に、持統王朝の京を新しく造ろうというのが、「新益京」である。この京とは平城京である。

持統五年に地鎮祭を行い、持統六年に朱雀大路を視察した新益京(平城京)は、持統が存命中には完成しなかった。持統紀には「新益京(平城京)」完成の記事はない。この京の主となった天皇は元明である。元明の平城京遷都は、710年(和銅三年)3月10日である。持統が691年に地鎮祭を行ってから、約20年かけて「新益京」は完成した。これが近畿天皇家の首都である。

近畿天皇家の令制國

持統の藤原京遷都によって近畿天皇家が始まる。その新国家建設の核となったのが律令であった。

持統3年(689)	浄御原令(きよみはらりょう)二十二卷頒布
持統4年(690)	浄御原令施行
持統8年(694)	藤原宮への遷宮
持統11年(697年)	大宝令の撰定開始
文武4年(700年)	大宝令の撰定終了。大宝律の撰定開始
大宝1年(701年)	大宝律令(律六卷・令十一卷)制定
大宝1年(701年)6月	中央での、令の全面的な施行開始
大宝1年(701年)8月	律の編纂を終了(大宝律令の完成)
大宝2年(702年)10月	律令の諸国頒布
大宝2年(702年)11月	造籍(大宝戸籍)----律令の全国的施行開始
和銅3年(710)	平城京遷都
和銅5年(712)	古事記三卷完成
養老2年(718)	養老律令の撰定開始(完成)
養老3年(719)頃	「八十一例」の撰定
養老4年(720)	日本書紀(三十卷・系図一卷)完成

近畿天皇家による国替え

持統6年(692年)に持統は「伊勢」に行幸した。この時、持統はすでに奈良にいた。すでに近畿天皇家の時代である。「伊勢」行幸は5月に行われた。この時期は「農作」の時期で、農民が田植に忙しい。行幸の時期変更を中納言三輪朝臣高市麿が冠を脱いで求めたが、持統は強行したと伝えている。その時、付き添っていった石上大臣の歌が万葉集にある。

石上大臣の從駕にして作る歌 44

吾が妹子がいざ見の山を高みかも大和の見えぬ國遠みかも

歌の「大和」は、原文では、「日本」である。万葉集歌の原文で、「倭(ヤマト)」と歌えば、その国は九州天皇家の國をいう。石上大臣は、44番歌で、「日本」と詠って「ヤマト」と読んでいるが、この「日本」は近畿天皇家の都・奈良である。持統は統一国家建設のため奔走していた。九州天皇家の「伊勢(行橋市)」に存在した「天照大神」を関西の「伊勢」に遷居したのもこの時であろう。

近畿天皇家の精神的支柱として皇祖神、天照大神を「伊勢」に移し、祀ったのである。この「伊勢」は九州天皇家の「伊勢(行橋市)」ではなく、近畿天皇家の「伊勢(三重県)」である。令制國は記・紀に現れる九州天皇家の國ではない。近畿天皇家の新しい國である。これらの国々はもはや記・紀の國ではない。

近畿天皇家令制國図(新しい全国地図)

701年、制定された大宝律令に基づいて全国に、令制國が制定された。これらの国名の多くは九州天皇家が支配していた北九州の国名、地名であった。近畿天皇家は全国に新しく令制國を定めるに当たって、九州天皇家の国名を用いた。そして、かつての九州天皇家の領国へは、「二文字の好字を使って改名せよ」と、國名、地名は変更を命令したのである。

畿内：山城国・大和国・芳野国・河内国・和泉国・摂津国
 東海道：伊賀国・伊勢国・志摩国・尾張国・三河国・遠江国・駿河国・伊豆国・甲斐国・相模国・武蔵国・安房国・上総国・下総国・常陸国
 東山道：近江国・美濃国・飛驒国・信濃国・諏方国・上野国・下野国・陸奥国・石背国・石城国・出羽国・羽前国・羽後国
 北陸道：若狭国・越前国・加賀国・能登国・越中国・越後国・佐渡国
 山陰道：丹波国・丹後国・但馬国・因幡国・伯耆国・出雲国・石見国・隠岐国
 山陽道：播磨国・美作国・備前国・備中国・備後国・安芸国・周防国・長門国
 南海道：紀伊国・淡路国・阿波国・讃岐国・伊予国・土佐国
 西海道：豊前国・豊後国・筑前国・筑後国・肥前国・肥後国・日向国・大隅国・多禰国・薩摩国・壱岐国・対馬

ここに現れる「伊勢国」「淡海国」「常陸国」「因幡国」「丹波国」「石見国」「播磨国」「尾張国」「美濃国」「伊豫国」「土佐国」「讃岐国」「出雲国」等々は記・紀で馴染みの国である。これらの国は九州天皇家の古代国であった。持統は新しい律令国家を定めるに当たって九州天皇家の国名を用いた。古代日本には地図は3つ存在した。九州天皇家の地図・日本國天皇家の地図と持統の近畿天皇家の地図である。日本書紀30巻の地図は九州天皇家と日本國天皇家の地図である。ところが八世紀の近畿天皇家の地図は同じ国名・地名であってもそれは新しい地図である。この地図は現代へ通じる地図である。

持統の国替えの結果、元の九州天皇家の国がどこに存在したか分からなくなってしまった。こうして九州天皇家の国々は歴史から消え去った。消えゆく九州天皇家への哀悼歌集として編纂されたのが万葉集(第一巻・第二巻)である。万葉集(第一巻・第二巻)は九州天皇家と持統近畿天皇家の歌である。

日本の天皇となった天武は、元号を「朱鳥」と定めたが、國名は変えなかった。たとえば、唐を興した李淵は、隋王朝の家臣であったが、隋を倒して建国したその時、國名を「隋」から「唐」に変えた。しかし、天武は新しい国号を定めなかった。国号は日本國天皇家の國名を使い「日本國」とした。天武は日本國天皇家の祖は九州天皇家と同じ祖で、いわば日本國天皇家が本家であると認識していたのであろう。天武の妃・持統が日本國天皇と重臣の間に生まれた娘だったことが「本家一分家」の関係を物語っている。

近畿天皇家の代

690	697	707	715
持統天皇 (太宰府から藤原京へ)	文武天皇 (藤原京)	元明天皇 (平城京)	

持統紀の舞台は太宰府と藤原京である。持統は天武の死後、しばらく、太宰府で全国を統治した。しかし草壁皇太子の死後、父の國、日本國天皇家の藤原京に遷都した。日本書紀の最終巻持統天皇は太宰府と藤原京、この二つの京が舞台である。そして、これらの記録はいずれも事実である。だが、持統紀には九州と奈良の出来事が分別されことなく混在している。たとえば、「吉野宮」が度々登場する。この「吉野宮」も二つに分けて考えるべきである。一つは小倉南区の竹馬川河口の「吉野」に存在した九州天皇家の「吉野宮」である。持統が行幸した時、人麿が歌って有名である。

吉野の宮に幸しし時、柿本人麿の作る歌 (万葉集巻1-36)

やすみし わが大王の 聞し食(め)す 天の下に 国はしも 多(さは)にあれども 山川の 清き河内
 と 御心を 吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太敷(ふとし)きませば 百礪城(ももしき)
 の 大宮人は 船並めて 朝川渡り 船競ひ 夕川渡る この川の
 絶ゆることなく この山の いや高知しらす 水激(たぎ)つ 滝の都は 見れど飽かぬかも

この「吉野の川」は小倉南区を流れる竹馬川だと確定できる。その理由は「水激(たぎ)つ」という表現である。これは「逆巻く波」の描写である。竹馬川は満潮時、周防灘の満ち潮とぶつかり、逆巻いて流れる。

持統紀のもう一つの「吉野」は日本國天皇家の離宮があった奈良「吉野」の宮である。奈良吉野の宮には竹馬川の吉野の宮の華やかさはない。孤独な寂寥感があるだけである。持統はこの山奥の吉野の宮にも度々訪れているが、歌はない。

文武天皇の歌が残る。

大行天皇、吉野の宮に幸し時の歌

み吉野の 山の嵐の 寒けくに はたや今夜も わが独り寝む (万葉巻1-74)

日本書紀最終巻持統天皇は太宰府と藤原京の二つの記事記録である。ここには九州と奈良が分別なく書かれている。持統四年の即位を境として、それ以前が太宰府の治世で、それ以降が藤原京の治世である。

日本書紀には九州から奈良藤原京への遷都は明記されていない。持統朝の歌人であった柿本人麿はこの遷都を悲しみを込めて歴史的に詠っている。

万葉第3巻304

大君の遠の朝廷とあり通ふ島門を見れば神代し思ほゆ

人麿が海路で筑紫国に下った時に作った歌である。大君とは持統である。筑紫とは博多で、島門とは彦島瀬戸である。人麿は関門海峡を博多へと船で下っていた。その時多くの船団が蟻の行列のように東へ東へ航海していくのに出会った。太宰府から奈良へ向かう持統朝の人々の船だった。太宰府から遠く離れた奈良の持統朝廷に九州天皇家の重臣達は瀬戸内海を東進移動した。島門は九州天皇家の伊邪那岐命・伊邪那美命が「大八洲」建国に出発した瀬戸だ。また神武もこの島門を通して東征へと出発した。そして持統もまた島門を通して奈良に遷ろうとしている。人麿は奈良に移らず九州に残った。九州天皇家の人々との別れの歌である。

天智紀が伝えるように、持統は日本國天皇天智の娘である。持統は13歳の時、北九州にいた大海人皇子の下に嫁いだ。やがて壬申の乱が起こり、大海人皇子は勝利して即位する。持統は皇后となり、そのまま九州で生涯を終えるかと思われたが、草部皇子がなくなってしまう。ここで、持統は九州を離れ、日本國天皇家の都、藤原京への遷都した。持統にとっては里帰りである。持統にとって大宰府も藤原京も自分が慣れ親しんだ京である。

九州天皇家が去ったのち、あれほど賑わった「近江の大津の宮(小倉南区)」は廃墟となった。柿本人麿はこの有様を歌に詠んだ。この時、人麿自身は「讃岐國(彦島)」から故郷(苅田町)への流刑の身の上であった。九州天皇家都の廃墟と流刑、二つの悲しみがこの歌を名歌にしている。

大津の宮に集った九州天皇家の人々は奈良に遷ってしまっ、ここには誰もいない。もう二度と九州天皇家の人々と会うことはないのだ。

近江の荒れたる都を過ぐる時 柿本朝臣人麿の作る歌 29

玉櫛 畝傍の山の 檀原の 日知の御代ゆ あれまし 神のことごと 梅の木 の いやつぎつぎに 天の下 知らしめしを 天にみつ 倭をおきて あをによし 平山を越え いかさまに思ほしめせか 天離る夷にはあれど 石走る 淡海の國の ささなみの 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ 天皇の 神の尊の大宮は 此処と聞けども 大殿は 此処と言へども 春草の 茂く生ひたる 霞立ち 春日の霧れる 百磯城の 大宮處 見れば悲しも

反歌 30・31

ささなみの 志賀の辛崎 幸くあれど 大宮人の 船待ちかねつ
ささなみの 志賀の大わだ 淀むとも 昔の人に またも逢はめやも

日本書紀は九州天皇家、日本國天皇家、九州天皇家、近畿天皇家と、4重層構造となって作成されている。このような史書となったの持統朝の大義名分が反映している。持統は日本國天皇家の正当な継承者である。これが日本書紀の大義名分である。しかし、史実は異なっている。日本國天皇家の正当な継承者は天智の皇太子、大友王であった。大友王から国権を奪ったのは持統の夫、天武である。持統は正当な皇位継承者ではなく、篡奪者だった。この史実が4重層の日本書紀として編纂された真の理由である。

だが、いかに権力者が編纂したとはいえ、あまりにも史実を無視した無謀な日本書紀編纂を日本國天皇家の人々、九州天皇家の人々が受け入れたのにはそれなりの理由が存在する。持統の父、日本國天皇家と持統の夫天武、九州天皇家はどちらも「阿米(阿每)」を祖とする天皇家であった。日本國天皇家は本家、九州天皇家は分家の姻戚関係にあった。ここに日本國天皇家と九州天皇家を一元化することの大義名分が存在したのである。

日本の天皇家には北朝、南朝の流れが存在する。その源流はここに発する。

六世紀から八世紀は日本國天皇家－九州天皇家－近畿天皇家と国権が変遷した激動の時代だった。その歴史を日本書紀は近畿天皇家に一元化して書き留めた。